

花ノ木遺跡・中街道遺跡発掘調査報告書

－ 都市計画道路北島藤島線街路改良工事に伴う埋蔵文化財調査 －

2 0 1 3

岩 倉 市 教 育 委 員 会
株 式 会 社 ア ー キ ジ オ 東 海



花ノ木遺跡から南側を望む遠景（北から）



中街道遺跡から北側を望む遠景（南から）

序

岩倉市は、県指定史跡でもある大地遺跡のほか多くの弥生時代の遺跡が存在します。戦国時代には岩倉城が築かれ、尾張北半分を支配する政治・経済の中心地であったなど、縄文時代から連綿と人々の営みの続いてきた土地です。

この度、報告書を刊行することになった花ノ木・中街道遺跡は、岩倉市の南部を東西に貫く都市計画道路北島藤島線の建設に先立って行われた試掘調査でその存在が明らかになった遺跡です。その調査面積はおよそ 1,800 m²となります。

調査の結果、周辺に水田が広がっている花ノ木遺跡からは、中世の区画溝が見つかるなど人々の生活空間であったことが判明し、遺跡が営まれていた当時は現在とは違った光景が広がっていたことがわかりました。中街道遺跡からは、古代の住居跡が見つかったことで、周辺遺跡との関連性について新たな見解が広がりました。又中世の大規模な区画溝が見つかったことで、岩倉城が築城される以前の岩倉市の姿を想像する材料となりました。

今回の調査結果が、地域の歴史の一端を記録したものとして皆様に活用されるとともに、岩倉市という地域の歴史を改めて見つめなおす機会ともなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、関係各機関および関係者の皆様からのご指導とご配慮、また地域住民の方々のご協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

平成 25 年 3 月

岩倉市教育委員会
教育長 長屋勝彦

例 言

1. 本書は、愛知県岩倉市曾野町下街道、隅田、花ノ木地内に所在する、花ノ木遺跡、中街道遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、岩倉市（市長 片岡恵一）からの委託を受け、岩倉市教育委員会生涯学習課および岩倉市曾野町発掘調査委員会の指導のもと、株式会社アーキジオ東海が実施した。

3. 調査期間、調査面積、調査担当者、岩倉市曾野町発掘調査委員会は次のとおりである。

調査期間 平成 24 年 8 月 20 日～平成 25 年 2 月 27 日（屋外調査）

平成 24 年 11 月 1 日～平成 25 年 3 月 28 日（整理、報告書作成）

調査面積 420 m² 花ノ木遺跡 1,358 m² 中街道遺跡

調査担当者 新宅輝久 松永篤知（株式会社アーキジオ東海）

土木世話役（施工監理） 春本和浩（株式会社アーキジオ東海）

測量士 宮本 斉（株式会社アーキジオ東海）

岩倉市曾野町発掘調査委員会

赤塚次郎 （公財）愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター 副所長兼調査課長

野口哲也 愛知県教育委員会生涯学習課 文化財保護室 主査

山川和子 岩倉市文化財保護委員

4. 調査にあたり、曾野町区長および役員の方々、さらに遺跡の周辺住民の皆様には多大なるご援助、ご協力を頂いた。また次の諸氏、諸機関からも指導、助言、協力を得た。記して謝意を表します。

（50 音順 敬称略）

愛知県教育委員会 岩倉市教育委員会生涯学習課 岩倉市建設部都市整備課

井川祥子 内堀信雄 河野典夫 鈴木景二 鈴木正貴 武部真木 永井邦仁

早野浩二 山内伸浩

5. 本書の執筆は第 1 章 1 節を岩倉市教育委員会生涯学習課、山内宏之が執筆し、第 1 章第 2 節と第 2 章を松永が担当し、第 3 章・第 4 章は新宅、松永、高野裕二が行った。
6. 木製品の樹種同定は、パリノサーヴェイ株式会社に依頼した。
7. 出土品及び原図、写真類は岩倉市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 本書が使用する方位は真北、水平基準は海拔高である。
2. 座標は公共座標（世界測地系）を基に、花ノ木遺跡では $X = -81335$ 、 $Y = -26545$ 、中街道遺跡では $X = -81345$ 、 $Y = -26545$ 、を起点とする A0 を、遺跡ごとに、調査範囲を網羅できる位置に設定した。グリッドは真北を基線として 5 m 四方を区画して設定しグリッドの名称については南西隅に位置するグリッド名から北→東方向へ展開する 1 グリッド、南北方向にアルファベット（南から A、B、C……）を、東西方向にはアラビア数字（西から 1、2、3……）を用いてこの両者を組み合わせて表記した。
3. 遺構の表記には次の記号を用いた。
SB: 掘立柱建物 SD: 溝 SE: 井戸 SK: 土坑 SI: 竪穴建物 SP: ピット SX: 不明遺構
4. 遺構の土色、土器胎土色は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』による。
5. 遺構図面および遺物実測図内の指示は以下のとおりである。

□: 地山部分	■: 赤彩
■: 須恵器断面	□: 釉薬範囲
■: 灰釉陶器断面	■: 煤範囲
□: 古式土師器・土師器、山茶碗、施釉陶器断面	■: 使用痕範囲
6. 土器実測図中に記した矢印はケズリ調整の方向を示したものである。
7. 土器実測図断面図中の破線は粘土積み上げ痕や接合痕である。
8. 本書挿図の縮尺は基本として次のとおりである。
遺構図版 掘立柱建物（1:80）土坑（1:40）竪穴建物（1:40）
遺物図版 土器（1:3）石製品（1:3）木製品（1:3）
9. 本書内の遺構・遺物の柱穴・井戸の名称、器種名称、年代観は下記のものによる。
 - a. 掘立柱建物のいわゆる柱穴等の名称および井戸の名称については次の通り定義する。
「柱穴」とは柱位置に遺存する穴の総称であり、「柱穴掘方」とは柱を据え付けるための穴のことである。また、「柱痕」「柱痕跡」とは柱掘方の中の柱が立ったまま腐食し空洞化して土が流れ込んだもの、または土壌化した部分を指す。井戸については、その名称を宇野隆夫「井戸考」に準じた。
 - b. 器種名 須恵器の器種名は、無高台杯が杯A、有高台杯は杯Bとし、その他は「土器の発達」『世界考古学大系 4』や『愛知県史 資料編 4』によった。古式土師器、灰釉陶器、山茶碗類、古瀬戸は下の資料に準じた。
 - c. 年代観 古式土師器：赤塚次郎 1990「V 考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
須恵器・土師器：植崎彰一 1961「土器の発達」『世界考古学大系 4』平凡社、『愛知県史資料編 4』
灰釉陶器：植崎彰一 1961「土器の発達」『世界考古学大系 4』平凡社、『愛知県史資料編 4』
山茶碗類：藤澤良祐 1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要 3』三重県埋蔵文化財センター
古瀬戸：藤澤良祐 1995「古瀬戸古窯址群Ⅲー古瀬戸前期様式の編年ー」『研究紀要 3』
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
藤澤良祐 1991「古瀬戸古窯址群Ⅱー古瀬戸後期様式の編年ー」『研究紀要 X』
瀬戸市歴史民俗資料館

目 次

序	
例言	
凡例	
1. 調査の経緯と経過	
(1) 経緯と諸手続き	1
(2) 経過と調査方針	2
2. 遺跡の環境	
(1) 地理的環境	3
(2) 歴史的環境	3
(3) 基本土層	7
3. 調査の概要	
(1) 遺構と遺物	13
a. 花ノ木遺跡	13
b. 中街道遺跡	35
c. 自然科学分析	99
4. 総括	101

挿 図 目 次

第 1 図 調査位置図 (1:2500)	1	第 17 図 花ノ木遺跡SK1.4、SD4.5遺構図(1:40)	30
第 2 図 周辺遺跡分布図 (1:25000)	4	第 18 図 花ノ木遺跡 SK6、SD2.3遺構図 (1:40)	31
第 3 図 長福寺廃寺出土軒丸瓦 (1:3)	5	第 19 図 花ノ木遺跡 SK7、SD3 遺構図 (1:40)	32
第 4 図 薬師堂廃寺出土遺物 (1:3)	6	第 20 図 SK3、6 出土遺物実測図 (1:3)	33
第 5 図 花ノ木、中街道遺跡基本土層(1:60)	8	第 21 図 SK4 出土遺物実測図 (1:3)	34
第 6 図 花ノ木遺跡遺構全体図 (1:100)	9	第 22 図 中街道遺跡SI1、SK29遺構図(1:40)	39
第 7 図 中街道遺跡遺構全体図 (1:200)	11	第 23 図 中街道遺跡SI2、3遺構図(1:40)	40
第 8 図 SD1.2 出土遺物実測図 (1:3)	18	第 24 図 竪穴建物(SI)出土遺物実測図(1:3、1:4)	41
第 9 図 SD3.5.7 出土遺物実測図 (1:3)	19	第 25 図 中街道遺跡SI4.5遺構図 (1:40)	42
第 10 図 SD4.6 遺物出土状況図 (1:40)	20	第 26 図 中街道遺跡SI6遺構図 (1:40)	43
第 11 図 SD4 出土遺物実測図 (1:3)	21	第 27 図 中街道遺跡SI7.8遺構図 (1:40)	44
第 12 図 SD6 出土遺物実測図その 1 (1:3)	22	第 28 図 中街道遺跡SB1.2遺構図(1:80)	46
第 13 図 SD6 出土遺物実測図その 2 (1:3)	23	第 29 図 溝 出土遺物実測図その1(1:3、1:4)	50
第 14 図 SD6 出土遺物実測図その 3 (1:3)	24	第 30 図 溝 出土遺物実測図その2(1:3)	51
第 15 図 SD6 出土遺物実測図その 4 (1:3)	25	第 31 図 溝 出土遺物実測図その3(1:3)	52
第 16 図 花ノ木遺跡SK2.3.5、SD8遺構図(1:40)	29	第 32 図 溝 出土遺物実測図その4(1:3)	53

第 33 図	中街道遺跡 土坑遺構図その1(1:40)… 68	第 40 図	SX1 遺構図 (1:40) …… 78
第 34 図	中街道遺跡 土坑遺構図その2(1:40)… 69	第 41 図	SX1、SP30 出土遺物実測図(1:3)… 78
第 35 図	土坑出土遺物実測図その1(1:3)… 70	第 42 図	SX2、SE2 遺構図(1:80) …… 79
第 36 図	土坑出土遺物実測図その2(1:3、1:4)… 71	第 43 図	SX2 出土遺物実測図その1(1:3)… 80
第 37 図	土坑出土遺物実測図その3(1:3)… 72	第 44 図	SX2 出土遺物実測図その2(1:3)… 81
第 38 図	中街道遺跡 SE1、SK21 遺構図(1:40)… 74	第 45 図	SX2 出土遺物実測図その3(1:3)… 82
第 39 図	井戸(SE1、2)出土遺物実測図(1:3)… 75		

表 目 次

表 1	遺跡一覧表…………… 4	表 9	中街道遺跡 井戸遺構観察表…………… 84
表 2	花ノ木遺跡 不明遺構観察表…………… 83	表 10	中街道遺跡 土坑遺構観察表 1…………… 85
表 3	花ノ木遺跡 土坑遺構観察表…………… 83	表 11	中街道遺跡 土坑遺構観察表 2…………… 86
表 4	花ノ木遺跡 溝遺構観察表…………… 83	表 12	中街道遺跡 土坑遺構観察表 3…………… 87
表 5	花ノ木遺跡 ピット遺構観察表…………… 83	表 13	中街道遺跡 ピット、柱穴掘方遺構観察表1… 87
表 6	中街道遺跡 竪穴建物遺構観察表…………… 84	表 14	中街道遺跡 ピット、柱穴掘方遺構観察表2… 88
表 7	中街道遺跡 不明遺構観察表…………… 84	表 15 ～ 24	遺物観察表…………… 89
表 8	中街道遺跡 溝遺構観察表…………… 84		

図 版 目 次

図版 1	花ノ木遺跡全景（西から）・花ノ木遺跡垂直写真（上が北）
図版 2	SD4 遺物出土状況 SK4 しがらみ出土状況（南から）・SD4 遺物出土状況近景（東から） SD4 遺物出土状況近景（南から）
図版 3	花ノ木遺跡 SD4 出土遺物墨書赤外線写真
図版 4	SD6 遺物出土状況（北西から）・SD6 遺物出土状況近景（北西から）（北東から）
図版 5	SD6 土層断面（北西から）・SK4、SD4、SD5 完掘（北から）・SD6、SD7 完掘（西から）
図版 6	花ノ木遺跡 SD4 出土遺物・花ノ木遺跡 SD6 出土遺物
図版 7	中街道遺跡上層垂直写真（上が北）・中街道遺跡下層垂直写真（上が北）
図版 8	中街道遺跡東側全景（北東から）・中街道遺跡東側全景（南東から）
図版 9	中街道遺跡西側全景（北西から）・中街道遺跡西側全景（北東から）
図版 10	SI1完掘(北から)・SI2完掘(西から)・SI3完掘(西から)・SI4完掘(西から)・SI6完掘(南西から) SI6 竈完掘（南西から）
図版 11	SI7.8 完掘（南から）・SI8 掘方内遺物出土状況（北から）・SE1 完掘（西から） SE1 遺物出土状況（北から）・SD6 陶馬出土状況（東から）・SK67 遺物出土状況（南から）
図版 12	SX2 西側全景・SX2、SD7 全景（西から）・SD7 遺物出土状況（東から）
図版 13	中街道遺跡 SI 出土遺物・SX2、SD7 出土遺物
図版 14	中街道遺跡 SK67 出土遺物・SE1、SE2 出土遺物と SD6 出土陶馬

1. 調査の経緯と経過

(1) 経緯と諸手続き

本発掘調査の原因となった都市計画道路北島藤島線街路新設改良工事は、名鉄本線（犬山線）を越える高架橋の建設と、東西で接続する市道部分の整備事業である。工事日程が具体化する中で、愛知県教育委員会と岩倉市教育委員会は平成 23 年 10 月に試掘調査を行い遺跡の存在を確認した。

岩倉市建設部都市整備課より平成 23 年 11 月 16 日付けで文化財保護法第 94 条第 1 項の基づく通知が岩倉市教育委員会を経由して愛知県教育委員会に提出。民間調査機関を導入した発掘調査を実施することとなった。

平成 24 年 7 月に岩倉市建設部都市整備課から岩倉市教育委員会を通じて民間調査組織の株式会社アーキジオ東海と平成 24 年 7 月 18 日付で委託契約を締結した。

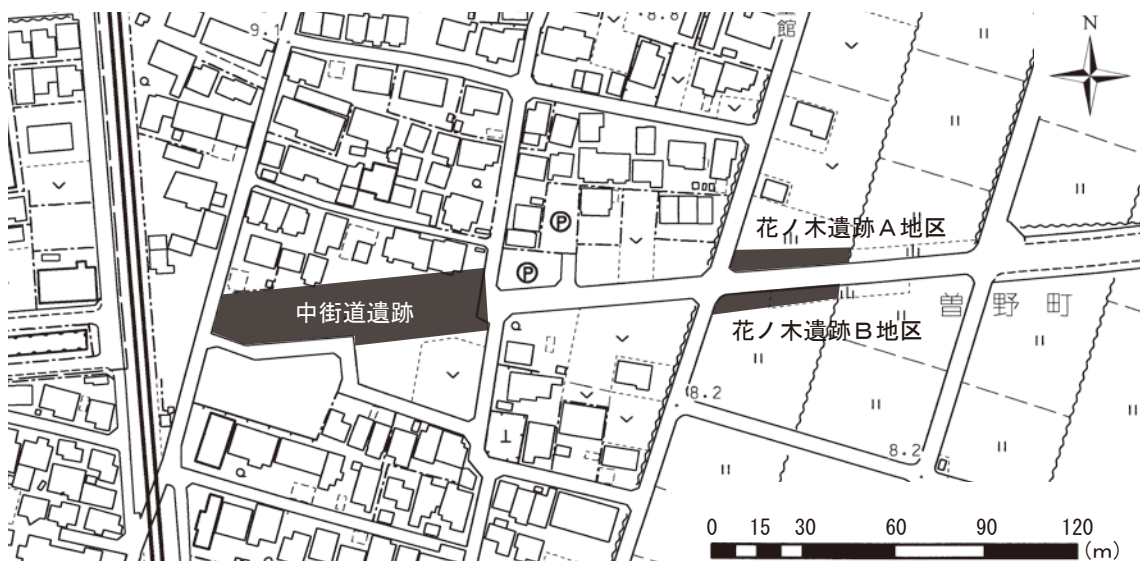
株式会社アーキジオ東海は平成 24 年 8 月 29 日付けにて文化財保護法第 92 条第 1 項に基づく届出を、岩倉市教育委員会を経由して愛知県教育委員会に提出、岩倉市教育委員会、岩倉市曾野町発掘調査委員会の指導監督のもと、株式会社アーキジオ東海が主体となり、現地調査、整理作業、報告書刊行を行うこととなった。

諸手続き

発掘届（2012.8.29 届出）

通知（24 教生第 1369 号 2012.8.31）

完了届・保管証・発見届（2013.3.29）



第 1 図 調査位置図 (1:2500)

(2) 経過と調査方針

7月18日の契約後、岩倉市教育委員会とアーキジオ東海が調査方針を協議し、それに基づいて現地調査を進めることが決まった。具体的には、道路工事の都合で花ノ木遺跡から着手すること、花ノ木遺跡・中街道遺跡とも表土等を重機で除去した後に人力で遺構検出・発掘等をおこなうこと、中街道遺跡は試掘結果に基づき上層・下層の二面調査とすること、排土置き場の都合で中街道遺跡は二面とも調査範囲の半分ずつを反転調査すること、空撮はラジコンヘリコプターを用いること、現場作業と同時に整理作業を進めること、月に1度有識者による検討会を実施すること、等を事前に確認した。

その後、8月～9月の間に準備工（現場事務所設置、調査区外周フェンス設置、現地地形測量等）をおこない、10月1日より花ノ木遺跡の表土掘削を開始した。花ノ木遺跡の調査区は道路を挟んで南北に分かれていたため、北側をA区、南側をB区とし、前者から表土掘削をおこなった。表土除去が済んだ安全な場所から、順次作業員を投入し、人力掘削も同時に進めていった。調査中はかなりの湧水が見られたが、各所に水中ポンプを設置して、適宜排水をおこなった。また、壁面が崩落する恐れがあったため、一部調査区の壁から約1m内側に入った位置に段を設けることにした。そして、遺構発掘がほぼ終了したところで、10月26日に花ノ木遺跡の空撮をおこなった。10月29日には残務に影響がない所から埋め戻しを開始し、11月1日の残務記録作業終了を経て、11月7日には埋め戻しも終了した。これで、花ノ木遺跡の調査は無事終了を迎えた。

花ノ木遺跡の調査が終わりに近づいた10月22日より、中街道遺跡の上層西側の表土掘削を開始した。そして、花ノ木遺跡同様、表土除去が済んだ場所から、順次作業員を投入していった。しかし、間もなく上層とした調査面は、後世の攪乱が著しいことが判明し、人力掘削は当初予想よりも早く作業が進んだ。そして11月7日には上層西側の空撮をおこない、11月8日より排土の反転移動に着手することになった。11月14日には中街道遺跡上層東側の表土掘削を始め、人力掘削も同時に進めたが、やはり上層東側もほとんどが後世の攪乱であった。そのため、11月22日には上層東側の空撮を実施し、中街道遺跡の上層調査は早々に終了することになった。

それから、11月27日より中街道遺跡東側を重機でそのまま掘り下げ、下層調査に入った。下層調査についてはかなりの掘削深度になるため、壁面崩落を防ぐ目的で、上層調査区の壁よりも約1m内側に段を設けることにした。そして重機掘削・人力掘削を経て、12月21日に下層東側の空撮をおこなった。東側の残務が終わった12月26日から排土の反転移動を開始したが、かなりの土量となったため、年明けも排土移動が続いた。ようやく1月16日に下層西側の重機掘削に移り、翌日から作業員を再投入、人力掘削を進めた。まだ一部調査中であつたが、2月2日には現地説明会を実施し、市民を中心に約200名の参加があつた。そして、遺構発掘がほぼ終了した2月8日に、下層西側の空撮を実施した。それから残務記録作業に移り、2月13日には現地調査が終了した。その後、直ちに中街道遺跡の埋め戻しを開始し、2月27日にはそれも終了した。

現地調査終了後、アーキジオ東海が整理作業に専念することになり、社内整理所にて遺物の実測・接合・写真撮影等をおこなった。そして3月29日に、発掘調査報告書（本書）を刊行した。

2. 遺跡の環境

(1) 地理的環境

愛知県北西部から岐阜県南西部にかけて広がる濃尾平野は、木曾三川（木曾川・長良川・揖斐川）によって形成された沖積平野である。その三方は山地・丘陵（北：飛騨山地、東：尾張丘陵、西：養老山地）に囲まれ、南は伊勢湾に面する。特に木曾川以東は尾張平野とも呼ばれ、概ね北東から南西に向かって扇状地帯・自然堤防帯・三角州帯に大別される。

愛知県北西部に位置する岩倉市は、この濃尾平野（尾張平野）の犬山扇状地扇端部から自然堤防帯にあたる。そのため土地は南西方向に向かって低くなっており、北東部の井上町が標高 12.6 m をはかるのに対し、南東部の野寄町では標高 6.8 m となる。このように緩く傾斜する市域の中央東寄りを、一級河川である五条川が南下している（岩倉市教育委員会 1983、岩倉市史編集委員会 1985）。

花ノ木遺跡・中街道遺跡は、ともに岩倉市南部の曾野町地内に所在する。地形的には五条川の自然堤防帯にあたり、花ノ木遺跡周辺は現標高約 8 m、中街道遺跡周辺は現標高約 9 m をはかる。

(2) 歴史的環境

岩倉市域には、縄文時代中期以来、自然堤防上を主として様々な遺跡が営まれている。以下、時代順に主な遺跡を見ていこう（岩倉市史編集委員会 1985、岩倉市文化財悉皆調査委員会 1995、愛知県埋蔵文化財センター 1992・2003・2011）。

まず縄文時代であるが、野辺遺跡（大地町）・ノンベ遺跡（川井町）から中期後半の加曽利 E 式系と見られる縄文土器が出土しており、この頃から人々が生活していたことが確実である。続いて、権現山遺跡（北島町・野寄町）や西北出遺跡（大地新町）では、後期の遺構（竪穴住居・貯蔵穴）や遺物（土器・石器）が見つかっており、定住生活の様子が具体的に見て取れる。さらに、八劔遺跡（八劔町）や御山寺遺跡（鈴井町・中野町）では晩期の条痕文土器が見つかることから、中期以降晩期に至るまで、市域は連綿と縄文人の生活の場であったことが分かる。

弥生時代に入ると、市域に西方から新しい文化が波及する。野辺遺跡・ノンベ遺跡から、前期の遠賀川式土器が出土していることがその好例である。中期にはさらに弥生文化が浸透するが、一方で市域では「大地式土器」と呼ばれる独特の沈線文土器が見つかる。この土器が発見・命名された大地遺跡（大地町）では、平面長方形で 6 本柱の竪穴住居が検出されており、住居形式も特徴的である。なお、「大地式土器」の類は、朝日式土器などと共に、町畑遺跡（中央町）や曾野遺跡（曾野町）でも見つかる。続く後期には、宮廷式土器（パレススタイル土器）の存在が特筆される。曾野町から出土した市指定文化財の「丹彩台付壺形土器」をはじめ、赤彩された精緻な作りの土器が当時の文化の高さを物語っている。

3 世紀後半頃、大型の墳墓が築かれるようになり、日本列島は古墳時代に入る。愛知県域においても前期（4 世紀）には古墳が築かれることが知られているが、市域には前期の古墳は確認されていない。

前期の市内遺跡としては、小森遺跡（大山寺町）・西北出遺跡・岩倉城遺跡（下本町）等があり、S字甕など該期の東海地方に特徴的な土器が多数出土している。その後、中期には市域でも古墳が確認できるようになり、5世紀後半の西出古墳（大山寺町）が有名である。この古墳では、市教委による発掘調査の結果、円筒埴輪・朝顔形埴輪を伴う方形の周溝が確認されている。後期にも、神宮寺古墳（稲荷町）・新溝古墳（本町）・七面山古墳（八剱町）等が築かれており、いずれも未発掘ではあるが七面山古墳と新溝古墳は円墳と推定されている。

古代には、長福寺廃寺跡（石仏町・一宮市千秋町）・御土井廃寺跡（稲荷町）・薬師堂廃寺跡（川井町）の3廃寺跡が重要である。これらの遺跡からは、7世紀後半～8世紀前半の各種瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鴟尾）などが出土しており、市域の先進性を示している。また、岩倉国衙説との関係で、国衙遺跡（稲荷町）の存在も注目される。

中世以降の遺跡では、岩倉城遺跡が挙げられる。西は岩倉街道、東は五条川に挟まれた自然堤防上にあり、県埋文センターによる発掘調査の結果、鎌倉時代～戦国時代の遺構（堀・溝・井戸・掘立柱建物など）・遺物（陶磁器・木製品など）が見つかった。特に戦国時代については、『武功夜話』の岩倉城の記載に合致するような内堀・外堀が確認されており、当時の様子が推し量られる。

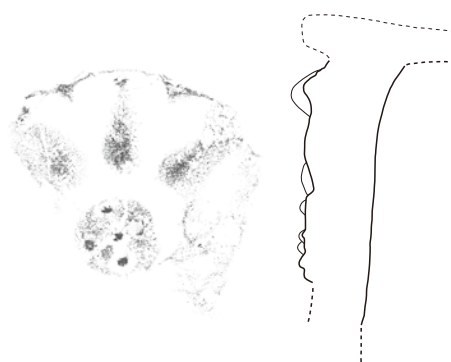
花ノ木遺跡・中街道遺跡の約1km圏内には、曾野遺跡・小森遺跡・西出古墳・神宮寺古墳・御土井廃寺跡・国衙遺跡・岩倉城遺跡等があり、それらとの関係が真っ先に想定される。



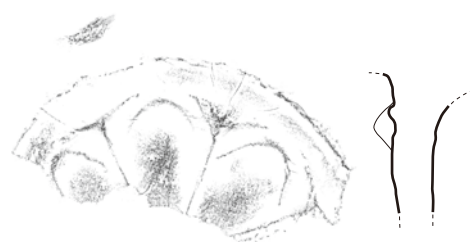
第2図 周辺遺跡分布図 (1:25000)



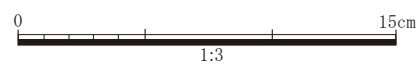
01



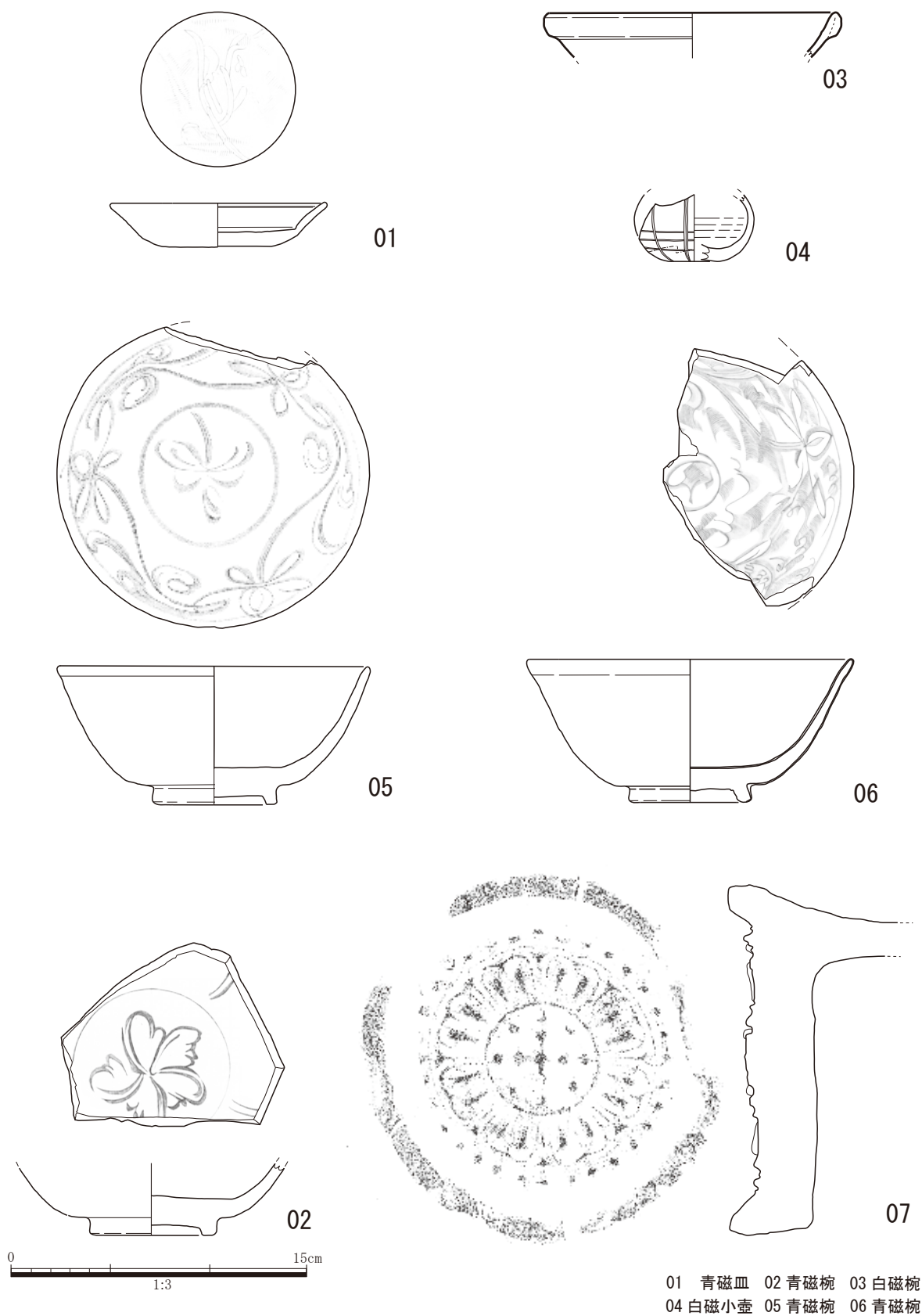
02



03



第 3 図 長福寺廃寺出土軒丸瓦 (1:3)



第4図 薬師堂廃寺出土遺物 (1:3)

(3) 基本土層

花ノ木遺跡・中街道遺跡の基本土層は、それぞれ次の通りである（第5図参照）。

花ノ木遺跡

I層：表土・盛土層である。土色・土質・混入物等の違いにより、I a層～I d層に分類できる。

I a層：10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト（Φ 10 ～ 50mm の礫 40%、ビニールゴミ 1%混）。

I b層：10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト（Φ 10 ～ 50mm の礫 5%混）。

I c層：2.5Y5/4 黄褐色シルト（10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト 10%混、全体の 10%鉄分沈着）。

I d層：7.5Y4/1 灰色シルト（全体の 3%鉄分沈着）。

II層：遺物包含層である。主として古代～中世の遺物が混在的に含まれる。5Y4/1 灰色シルト（全体の 3%鉄分沈着）。

III層：遺構検出面である。7.5Y5/1 灰色砂質シルト（全体の 30% 鉄分沈着）。

中街道遺跡

I層：表土層である。2.5Y5/1 黄灰色シルト（Φ 1 ～ 50mm の礫 30% 混）。

II層：上層調査の遺物包含層として調査した土層である。古代～近世の遺物が含まれていたが、それ以上に近代以降の遺物も多く入っていた。そのため近世以前の遺物は、直下のIII層に由来する遺物が混入した可能性が高い。2.5Y5/2 暗灰黄色シルト（2.5Y5/1 黄灰色シルト 10%、Φ 1 ～ 5mm の礫 1% 混）。

III層：下層調査の遺物包含層である。古墳時代～近世の遺物が混在的に含まれる。土色等の違いから上位と下位に二分でき、前者をIII a層、後者をIII b層とした。

III a層：上層調査の遺構検出面であり、上位の遺物包含層である。古墳時代～近世の遺物が混在的に含まれる。2.5Y5/3 黄褐色シルト。

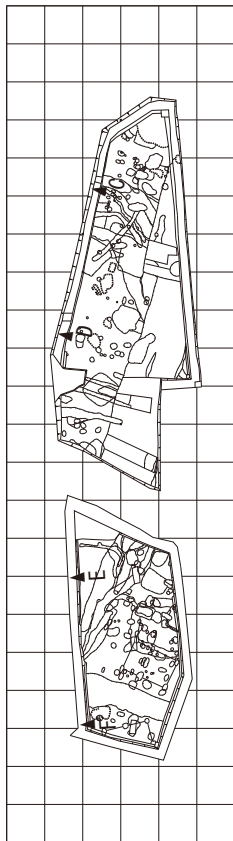
III b層：下位の遺物包含層である。古墳時代～中世の遺物がIII a層よりも多く含まれ、古代以前の遺物の割合が若干高い。2.5Y4/2 暗灰黄色シルト。

IV層：下層調査の遺構検出面である。シルトまたは砂質シルトが大半を占めるが、調査区西端は砂になる。2.5Y6/3 にぶい黄色シルト～砂。

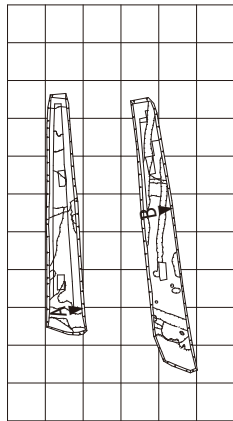
※中街道遺跡の西端は、西に向かって落ち込んでおり、III層とIV層の間に別の土層（2.5Y5/2 暗 灰黄色シルト（2.5Y6/3 にぶい黄色砂 10%混、全体の 20%鉄分沈着））が挟まれていた。

花ノ木遺跡と中街道遺跡は約 80 mしか離れていないにも関わらず、堆積土の土色・土質はかなり異なっていた。しかし、包含されていた遺物の時期を見れば、花ノ木遺跡の遺物包含層であるII層と中街道遺跡の遺物包含層であるIII層は概ね対応するものと見られる。従って、両遺跡の遺物包含層を挟む上下の層も、大枠の形成時期はある程度対応することが推測される。

中街道遺跡

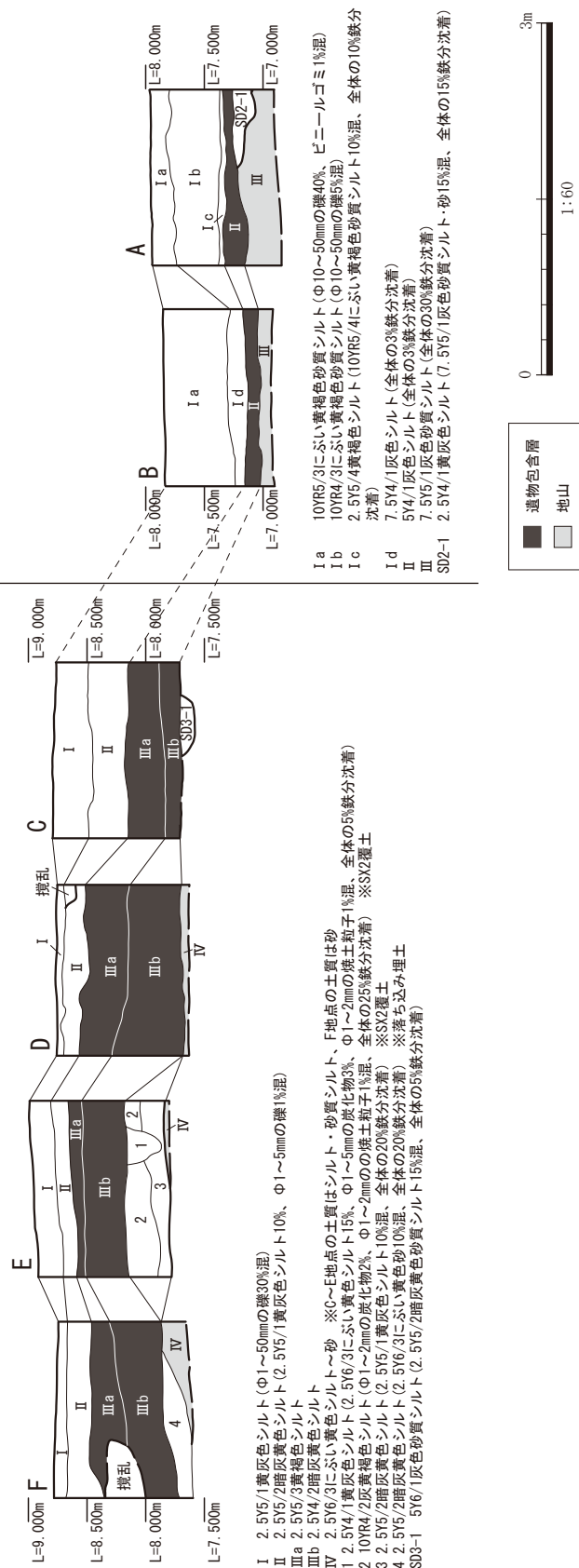


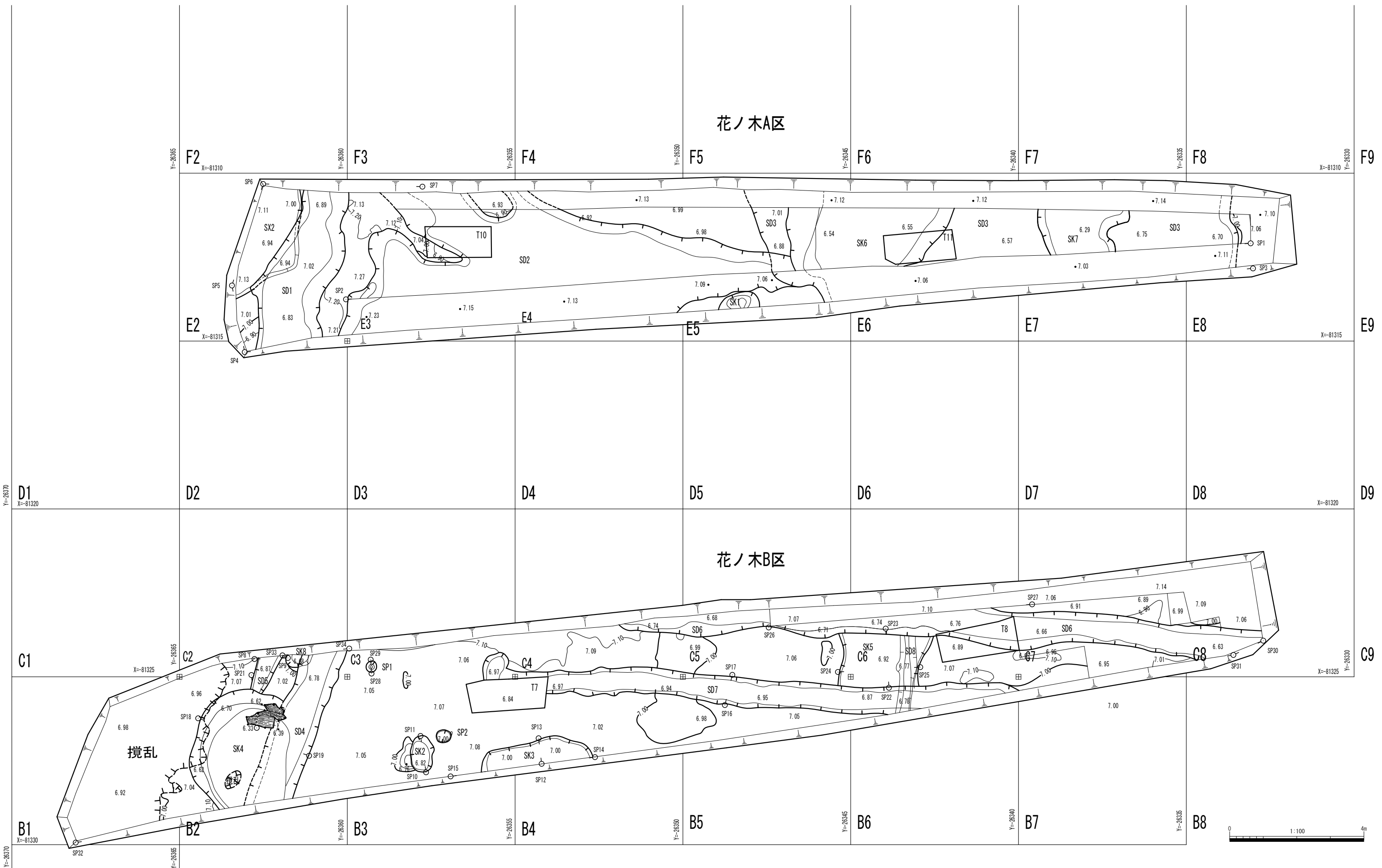
花ノ木遺跡



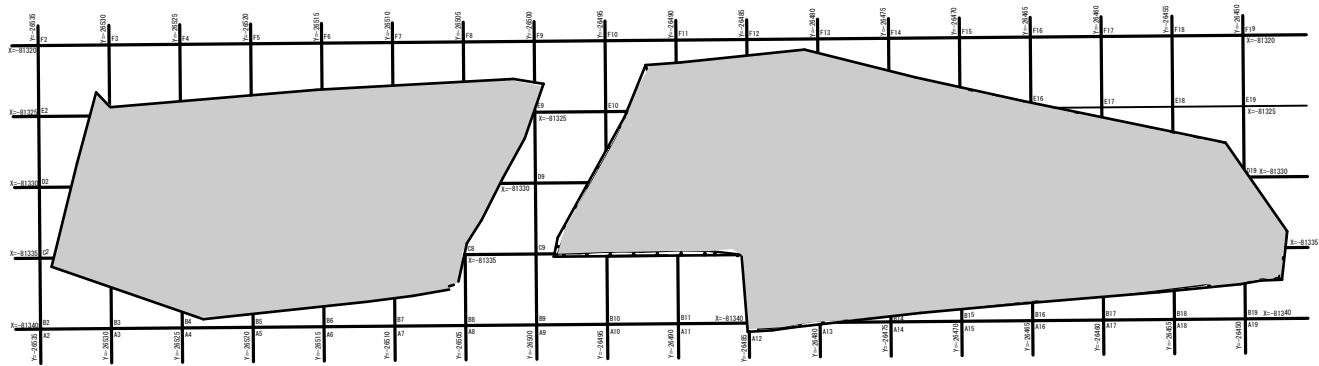
※下図A・Bは南壁を裏測したものを反転

第5図 花ノ木遺跡・中街道遺跡基本土層 (1:60)

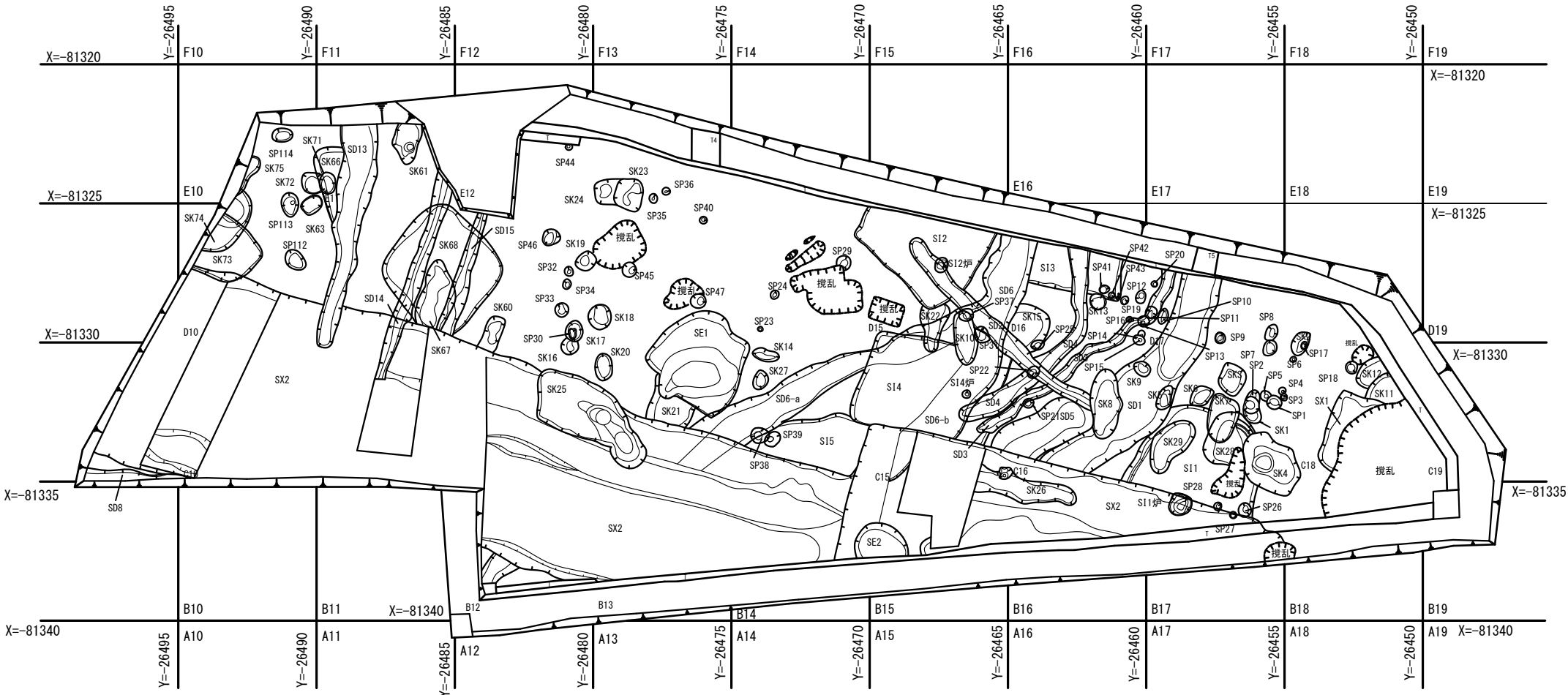




第6図 花ノ木遺跡遺構全体図 (1/100)



中街道遺跡 調査区模式図



第 7 図 中街道遺跡遺構全体図 (1:200)

3. 調査の概要

(1) 遺構と遺物

a. 花ノ木遺跡

花ノ木遺跡では溝 8 条、土坑 7 基、ピット 2 基、などを検出した。遺構から出土した遺物の時代は、7 世紀から 14 世紀代を中心に幅広く、長い年月をかけて、様々な人間の生活が営まれていた事が確認できた。

溝

SD1 (第 6 図、第 8 図参照)

遺構

A 区で検出した溝である。南北方向を向き、上幅は 2.0 m、深さ 0.32 mをはかる。遺構の西側で SX2 を切る形で検出している。底面は緩やかな U 字型を呈し、底面からやや急な傾斜で上端に至る。堆積土は 2 層からなり、遺物は須恵器甕、壺、山茶碗、古瀬戸、陶磁器などが出土している。

遺物

第 8 図 -1、3 は山茶碗である。1 は底部の小破片であるが、高台の粉殻痕は見られず、断面三角形となる。13 世紀代。3 は底部から体部の破片であり、高台はやや丸みを持つ扁平な形へと変わりつつある。13 世紀前葉、5 ～ 6 型式 (藤澤 1994) の頃のものと考えられる。2 は鉄釉の掛かる天目茶碗片であり、4 は灰釉の皿である。古瀬戸後期 (藤澤 1991、1995) の頃のものと考えられる。

SD2 (第 6 図、第 8 図参照)

遺構

A 区で検出した自然流路である。北西 - 南東方向を向き、上幅は 12.7 m、深さ 0.6 mをはかる。遺構の東側で SD3、SK6 に切られる形で検出した。平面形からは、直線的な配置などといった規則性は見られず、蛇行する様な形状を呈していた。底面は砂質で、部分的に浅い皿状となる部分も見られたが、大凡は平坦である。堆積土は 6 層からなり、ラミナ状堆積の見られた 4 層から下層が水流を伴った堆積のものと考えられる。

遺物は須恵器や山茶碗、陶器類が 1 層～ 5 層まで満遍なく出土し、流れ込みなどと云った埋没過程での混入遺物と考えられる。その中で特に最下層からは 7 世紀後半～ 8 世紀前半の緩い波状文を施す須恵器甕などが出土した。

遺物

第8図-5～7、9は須恵器の蓋と杯Bである。また15、16は甕である。5は蓋であり、扁平形のつまみを付ける。7、9は杯Bであり、底部の破片である。7の高台は細く方形である。9の高台もまた方形であるが幅広であり、底部は下方へ垂れる。おおよそ7世紀後半から8世紀前半の頃のものと考えられる。15、16は甕であり、15は口辺部に6条～7条のかなり緩い波状文を上下2カ所に施文する。口縁端部は方形で下方に垂れ、口縁部内側には稜を持つ。16は肩部片であり、叩き痕が残る。貯蔵具は8世紀代と考えられる。

14は土師器鍋である。器厚は厚く、口縁部は緩やかに屈曲し、平坦面を作る。調整はナデが中心であり、いわゆる清郷型の鍋である。時期は10世紀後半頃と考えられる。

8、10は灰釉陶器である。8は底部のみの出土であり、内面には浸け掛けの灰釉が若干見られる。高台は外反し、端部はとがる。H72 窯期並行期～百代寺期頃かと考えられる。10もまた底部周辺のみの出土であり、灰釉は体部外面の全面と体部内面の見込みとの境まで浸け掛けによる施釉が施されている。高台は内湾気味なものとなる。H72 窯期並行期以降のものと考えられる。

山茶碗はいずれも底部片であり11、12、13がある。11、12は尾張型のいわゆる荒肌手であり、13は東濃型であった。11は底部内面に使用痕が顕著に見られ、高台には靱殻痕が若干見られ、体部は幅広で丸みを持って内湾する形状である。13世紀前後、5型式頃のものと考えられる。12もまた底部内面に使用痕が見られる。底部は高台の端部が丸く作られている。

13は東濃型のいわゆる均一手山茶碗である。底部は小径となり、高台は紐状の細いものとなる。この高台には靱殻痕が見られ、器厚は薄いものであった。時期は14世紀前後の頃と考えられる。

17、18は古瀬戸である。17は壺の底部であり、18は足の部分が見られないが、深皿の底部片であろう。内外面ともに灰釉が施釉され、底部には回転糸切り痕が残る。15世紀代頃か。

SD3 (第6図、第9図参照)

遺構

A区で検出した自然流路である。南北方向を向き、上幅は13.2 m、深さ0.5 mをはかる。遺構の西側でSD2を切り、埋没途中で掘削されたSK6、SK7に切られるも、再びそれを含めて完全に埋没した事を確認した。平面形はSD2ほど蛇行した様子はなく、ほぼ直線的なものであった。しかし人為的な掘削痕や護岸施設などは見られていない。

堆積は3層からなり、最下層の3層では砂層が混入しラミナ状堆積となった痕跡が見られた。底面はほぼ平坦である。

遺物は、3層以外で見られ、須恵器や灰釉陶器、山茶碗や白磁などが埋没過程で混入した形で散発的に出土した。出土量などから遺物の主は山茶碗であり、これら遺物などと合わせて考えると、14世紀代には埋没していたことが考えられる。

遺物

第9図-1は灰釉陶器の椀の底部片である。体部内面を施釉し、体部外面にはへら削り痕などは見ら

れない。高台は細く、やや外反し接地する。

2～6、9、10は山茶碗類である。2、3は小碗である。底部から口縁端部へは外反しながら立ち上がり、体部中位で角度を変え内湾して端部にいたるものである。3は高台が幅広の扁平な形状になっている。12世紀中～後葉、4型式段階頃のものと考えられる。4、5、6は碗であり、均一的な胎土を持つ遺物である。高台は断面が二等辺三角形となり、やや内側が内湾気味な形状である。12世紀後葉～13世紀初頭の5型式頃のものと考えられる。9、10は東濃型の碗である。内面見込みの中央には指ナデ痕が見られる。高台は細く、靱殻痕が顕著に見られ、高台の貼り付け位置も底部下半となる。13世紀後半～14世紀頃のものと考えられる。

7は白磁の碗の底部片である。白磁釉は体部内面の全面と体部外面の上半に施釉し、下半は露体となる。底部は蛇目高台となり、平坦な形状である。口縁部は欠損してその形状は不明であるが、玉縁状に肥大する太宰府分類（太宰府市教育委員会 2000）のIV類にあたる可能性がある。8は須恵器高杯の脚部片、11は須恵器甕であり、12は灰釉陶器壺片となる。13は砥石である。

SD4（第6図、第11図参照）

遺構

B区で検出した溝である。ほぼ南北方向を向き、上幅は1.3 m、深さ0.28 mをはかる。遺構間の前後関係はSK4とSK8を切り、堆積土は単層であった。底面は浅いU字形を呈し、底面から上端へは西側壁面が緩やかな傾斜であるのに対し、東側壁面はややきつい立ち上がりとなる。

遺物は切り合いの見られなかった、北側部分で山茶碗がほぼ完形のものも含めて7点集中して出土した。これら遺物の出土位置は底面からでなく、浮いた形のものであり、その出土には祭祀などといった状況は見られなかった。堆積土は単層であることから、溝の廃絶過程で廃棄された遺物と考えられ、出土した遺物より12世紀後葉～13世紀前葉の頃には廃絶した遺構であると見られる。ほかに細片ではあるが須恵器や灰釉陶器なども出土しているが量や出土位置からこれらは流れ込みの遺物と考えられる。

遺物

第11図-1、2は須恵器である。1は蓋であり端部は屈曲して丸く収める。2は不明である。

3～12までは山茶碗類である。本遺構から出土した山茶碗類の多くは完形に近い形で一括出土したものであり、小皿などは見られず碗ばかりであった。5、6以外は胎土が荒く、いわゆる南部系（荒肌手）山茶碗、尾張型である。高台は幅広であり、丸みや方形の端部となり、断面形は三角形の形状を示し、靱殻痕も顕著に見られる。底部から口縁端部へは大きく内湾しながら立ち上がり、口縁部付近で角度を変え外反し端部にいたる。ただ8は体部の形状に丸みがさほど見られず、内径も他遺物と比較してやや大きいことから遺物の時期は、13世紀初頭～前葉頃と考えられる。遺物は総じて5型式～6型式である。

これら山茶碗類の4個体の高台裏には墨書が書かれており、大きく2種類に分類できる。1つは入りから大きく弓を描くもの（10、11、12）であり、もう1つは描かず払うもの（9）が見られた。文字はいずれも「花押」と考えられる。13は古瀬戸の壺であり、14は砥石である。研面は1面であり、砥石の側面では煤痕が見られた。

SD5 (第 6 図、第 9 図参照)

遺構

B 区で検出した溝である。南北方向を向き、上幅は 0.5 m、深さ 0.17 mをはかる。遺構間の前後関係は SK4 に切られるものであった。堆積土は単層であり、底面は浅い U 字形を呈し、底面から上端へは西側壁面が緩やかな傾斜であるのに対し、東側壁面はややきついものであった。検出した全長が短く深さも浅いことから遺物も須恵器が少量出土しているのみであった。

遺物

第 9 図 -14、15 は須恵器蓋である。14 は扁平形のつまみが付くタイプのものである。端部が欠損しているため形状は不明である。15 は端部のみであり、くの字に折り返し丸く収めるかたちであった。14、15 ともに 8 世紀代のものと考えられる。

SD6 (第 6 図、第 12 ～ 15 図参照)

遺構

B 区で検出した溝である。ほぼ東西方向を向き、上幅は 1.1 m、深さ 0.33 mをはかる。SD8、SK5 を切る形で検出した。堆積土は 6 層からなり、溝廃絶後は自然堆積であったところに、人為堆積である 1 層土が完全に遺構を埋没させた形となる。底面は浅い皿状であり、底面から上端へは、ほぼ直立気味の壁面となる。遺物は 1 層からの出土が大多数を占め、特に東端部分から集中して出土した。出土状況には特に祭祀などと云った意図的な配置は見られず、遺構の埋没過程で特定の場所に土器片などを集中して廃棄した跡と考えられる。さらに遺物片の遺構内での出土位置などから、北側壁面に向けて廃棄していることがわかった。

遺物は山茶碗、小碗を中心に、同時期の常滑系と考えられる甕や底部に靱殻痕らしきものが残る壺などの貯蔵具が目立って出土している。山茶碗類と貯蔵具である甕や壺が一括遺物として出土したことは、付近に生活空間である、建物群が存在している可能性をしめし、遺構の立地や遺物の出土状況から調査区域外の南側にその建物群などは展開している可能性がある。

山茶碗類や甕、壺などから、本遺構は 12 世紀中葉～12 世紀後葉頃には、廃棄された遺構であろうと考えられる。

遺物

第 12 図 -1 ～ 17 までは山茶碗類である。山茶碗類は小碗、小皿と碗がまとまって出土している。1 ～ 7 までは小碗と小皿、8 ～ 17 までは碗である。1 ～ 6 の小碗は総じて高台が断面三角形であり、若干の靱殻痕も確認できる。底部から口縁端部へは体部中位で角度を変え外反するものと、やや丸みを持って直線的に立ち上がるものの 2 種類が見られた。7 は小皿であり、2 に高台が付かない形と言って良いものである。これら小碗、小皿にセットとなる 8 ～ 17 の碗は、底部から口縁端部へ弱い丸みを持って立ち上がり、口縁部で弱く外反して端部に至るものが主であった。さらに少数ではあるが口縁部での外反が強いもの (9) も見られた。高台は端部が方形で断面は三角形となるものが主であったが二等辺三角形の形

状になりつつあるものも見られた(14)。碗の高台では靱殻痕は見られず、使用痕は体部内面の見込みを中心に広範囲に確認できる。

山茶碗類の時期は、小碗の出土があり、碗の形状から4型式に入るものであることは間違いない。しかし量的には極少量ではあったが小皿と一緒に出土している。また碗で高台の形状が5型式へと続く形状のものなども見られた。この傾向は、常滑系の1段階1b～2型式(柴垣、中野 2012)頃でも見られ、後述する常滑系と考えられる瓶、壺類や甕が供伴して出土していることから鑑み、4型式並行期でも新段階の一群(12世紀中葉～12世紀後葉、13世紀初頭?)である可能性が考えられる。

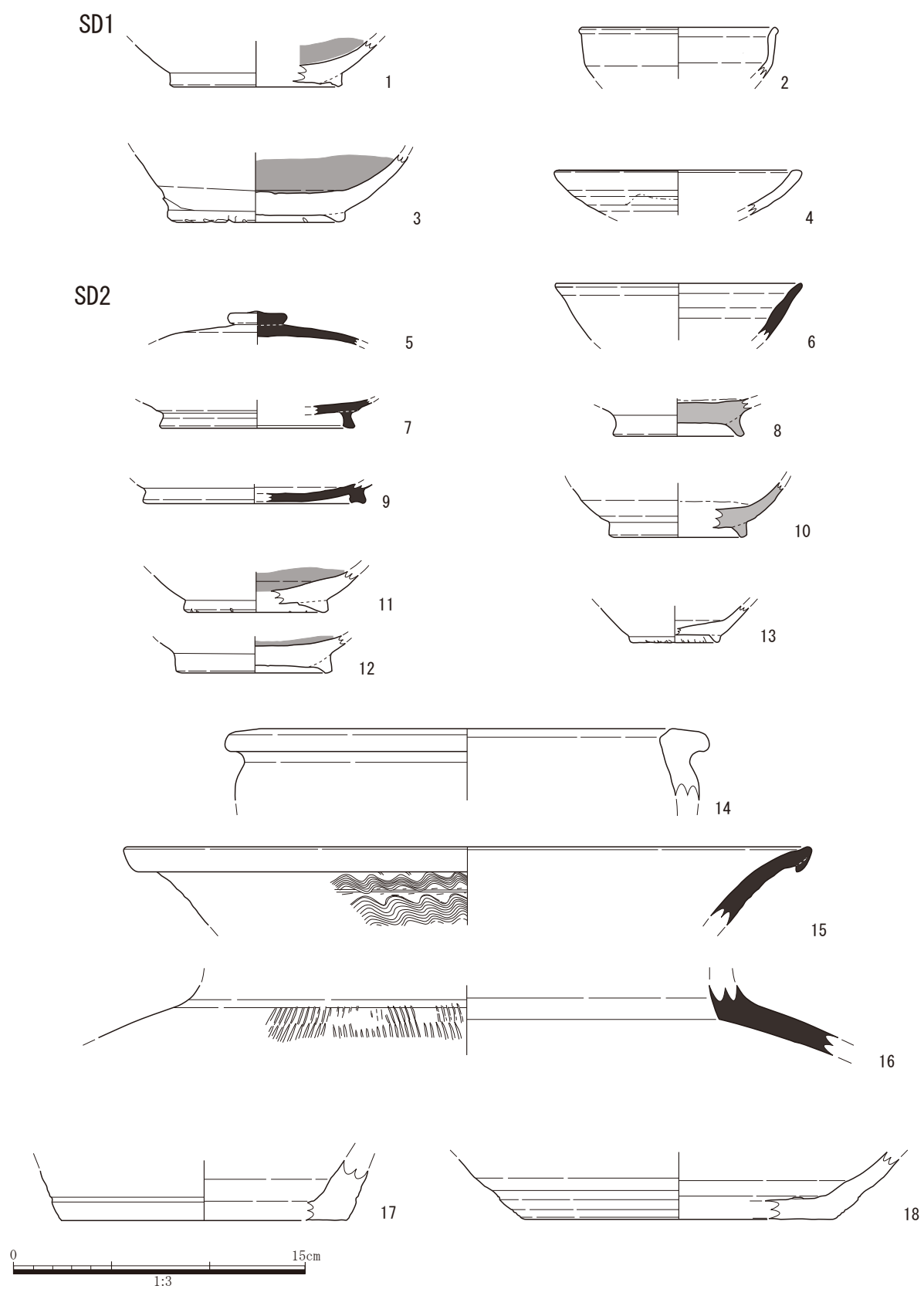
第13、14、15図18～26、28は須恵器の高杯と常滑系と考えられる壺類、広口長頸瓶、甕類である。須恵器は高杯(18)であり、流れ込みと考えられる。貯蔵具は壺類、広口長頸瓶(19、20、21、23、25、26、28)、壺胴部(22)、甕(24)などが見られた。

壺類は口縁部や肩部までのものが多く、胴部まで残存しているものは少ない。口縁部などの形状から、なで肩の肩部から、やや内斜気味に立ち上がる短頸壺(19、20)と短く逆ハの字形に外反する短頸壺(21、23)や長く直立しながら外反する広口長頸瓶(25、26、28)が見られた。19は口縁端部が丸く収まる形である。口辺部には指頭痕が確認でき、手びねりによって成形した痕跡が見られる。胴部は欠損して不明であるが、球形を呈していたものと考えられる。20、21は口縁部のみの出土であり、口縁端部には平坦面を作り出す。形状としては、22や23の様なかたちと考えられる。

広口長頸瓶は3個体出土した(25、26、28)。ともに口縁部は欠損していて不明であるが頸部は直立しながら外反するものであった。肩部は角張ったもの(25)や、なで肩のもの(26)、丸味を帯びたもの(28)などで唯一底部まで残存している26の高台からは、靱殻痕らしきものが確認できた。24は甕であり、口縁端部は折り返す形であった。口縁部はハの字形に開く。27は水注か小壺である。

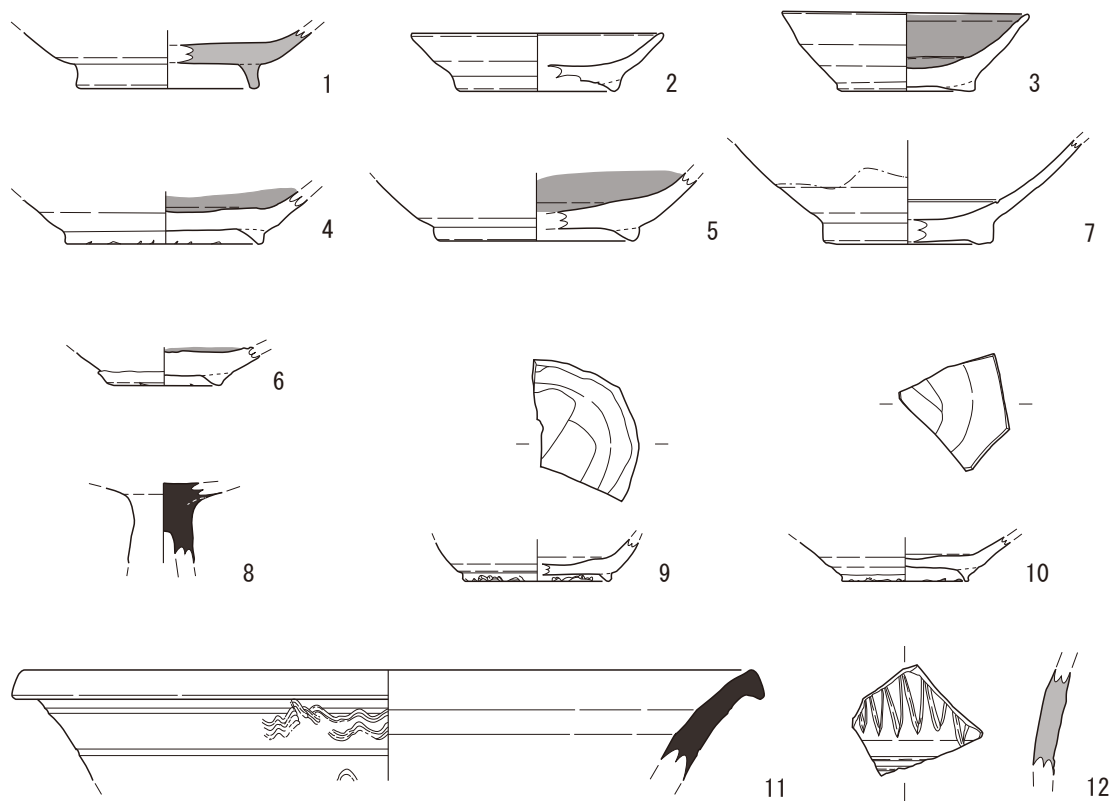


花ノ木遺跡B区 検出作業風景

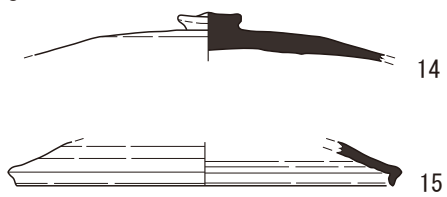


第 8 図 SD1、2 出土遺物実測図 (1:3)

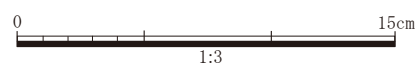
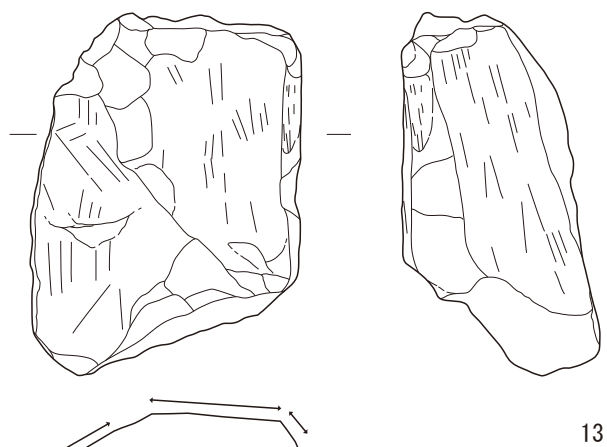
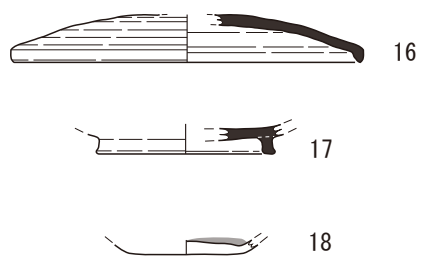
SD3



SD5

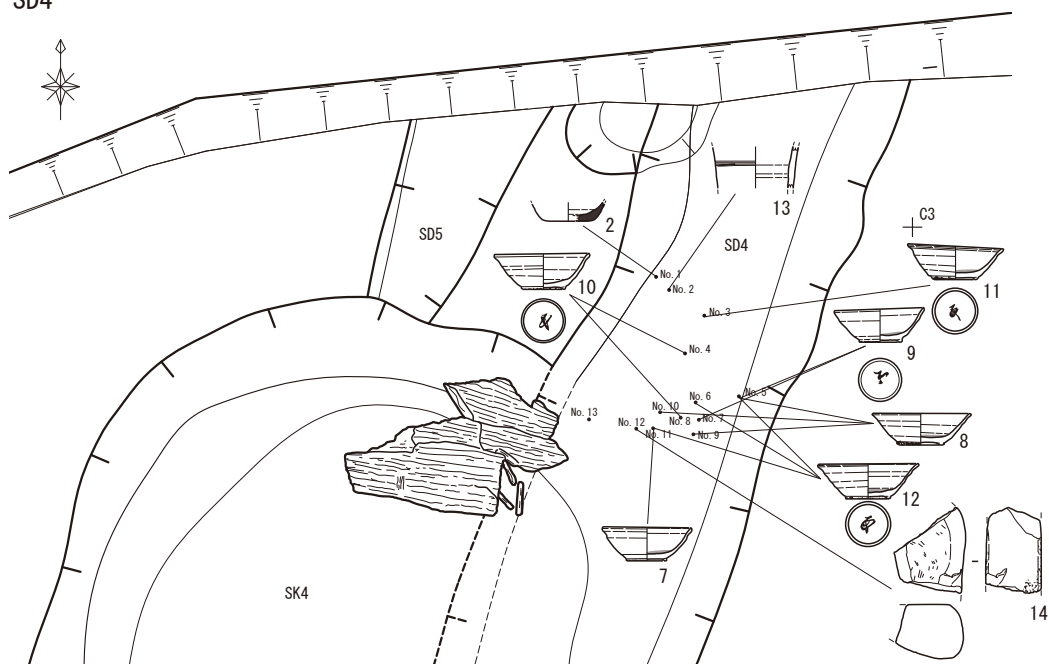


SD7

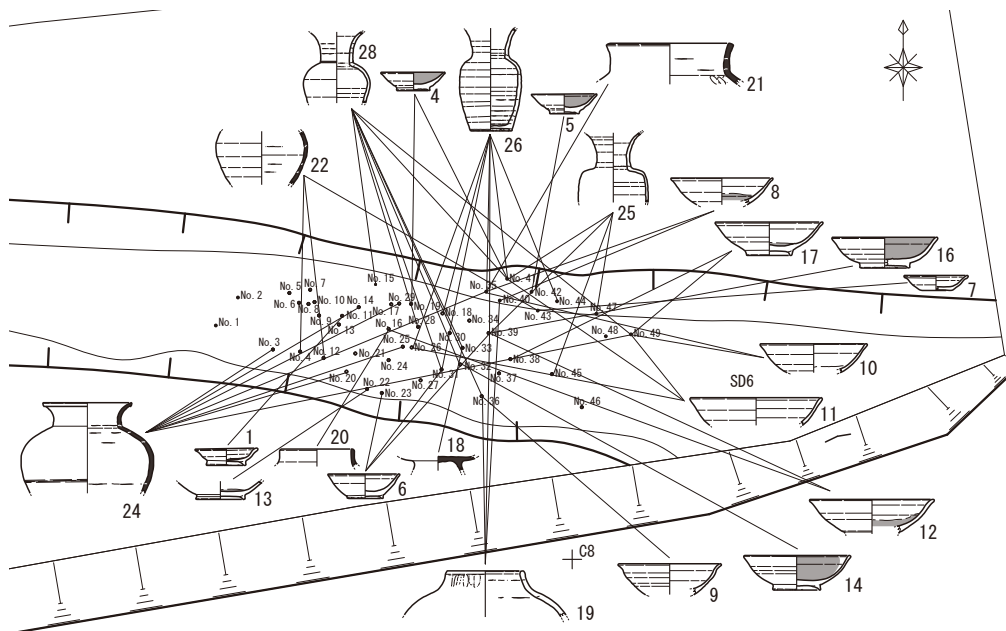


第9図 SD3、5、7出土遺物実測図(1:3)

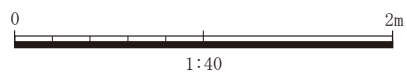
SD4



SD6

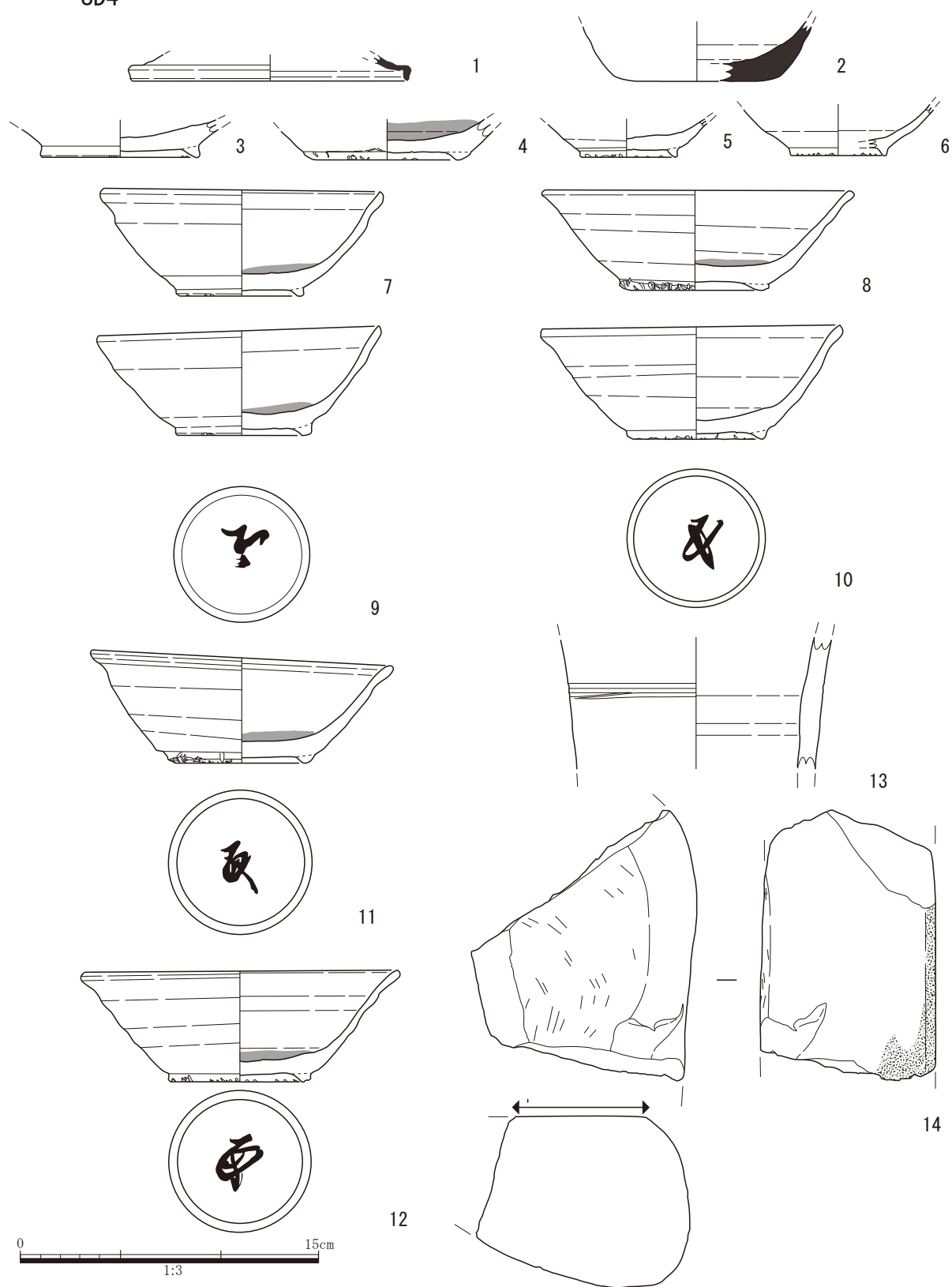


※各遺物実測図の縮尺は、SD6-22・24・25・26・28が1:24、それ以外は1:12

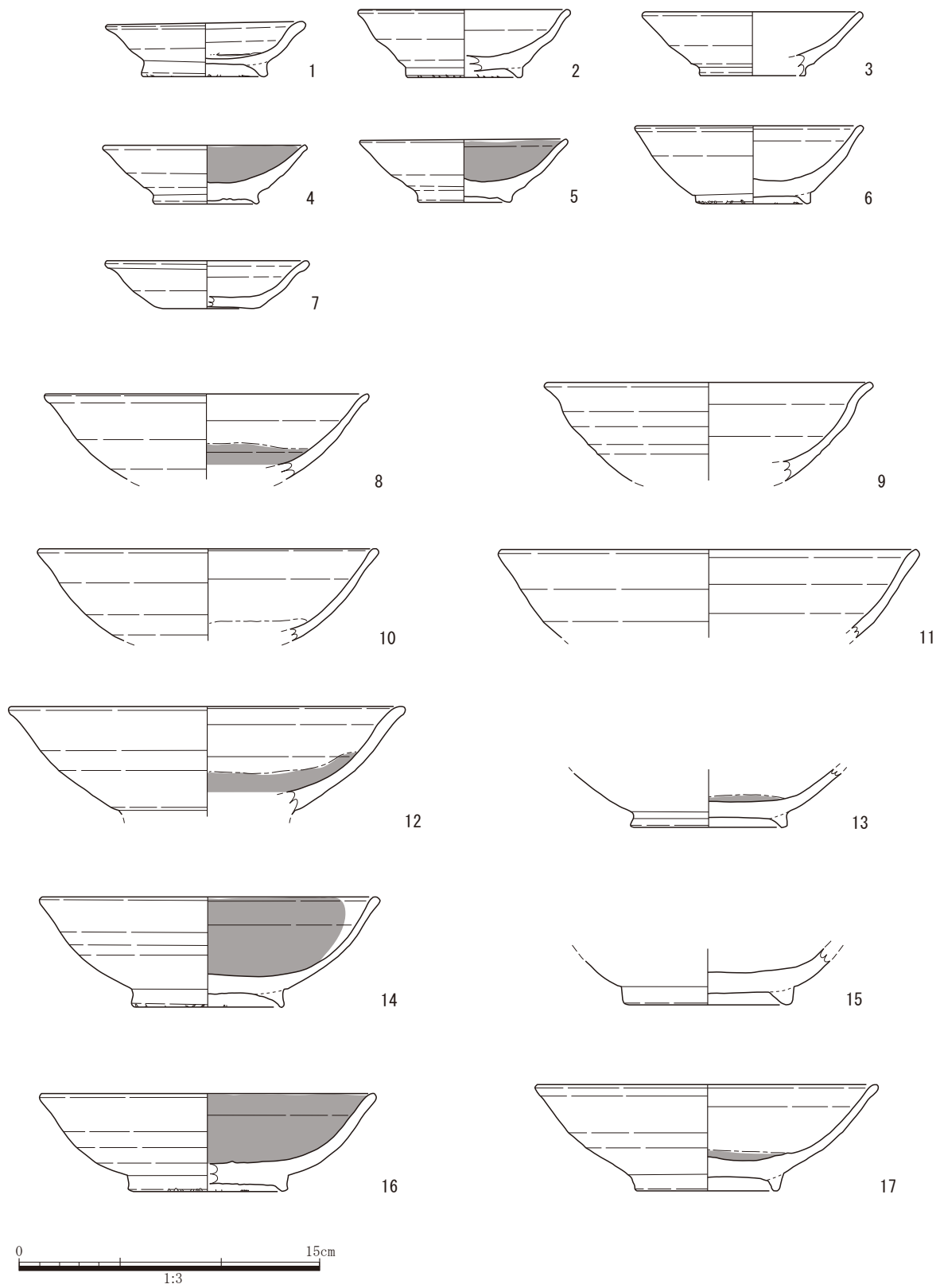


第10図 SD4・6 遺物出土状況図 (1:40)

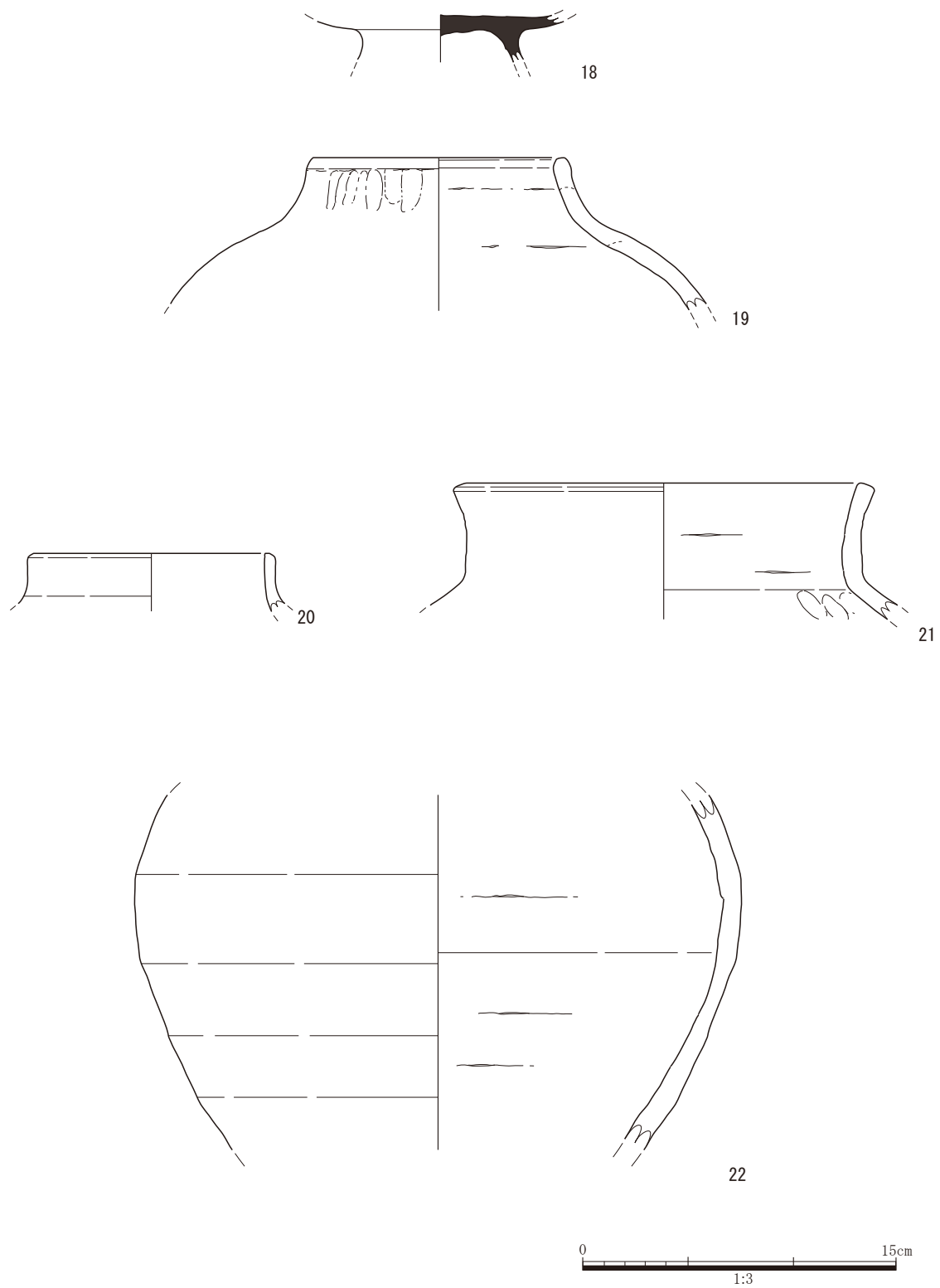
SD4



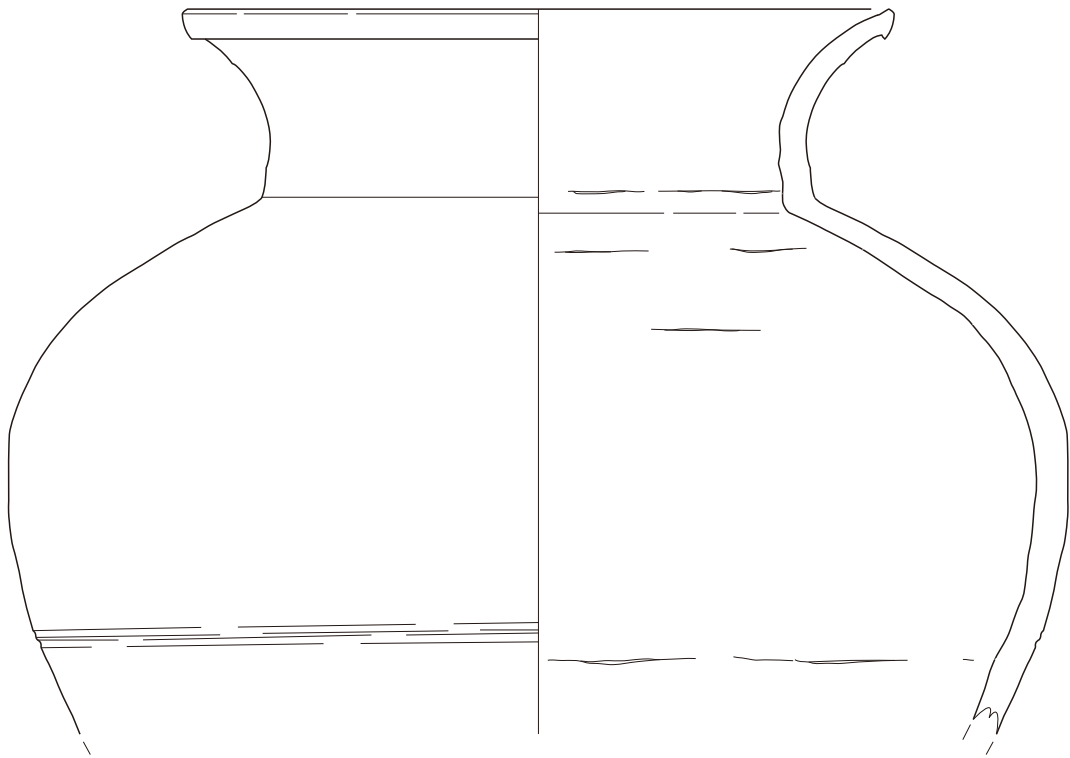
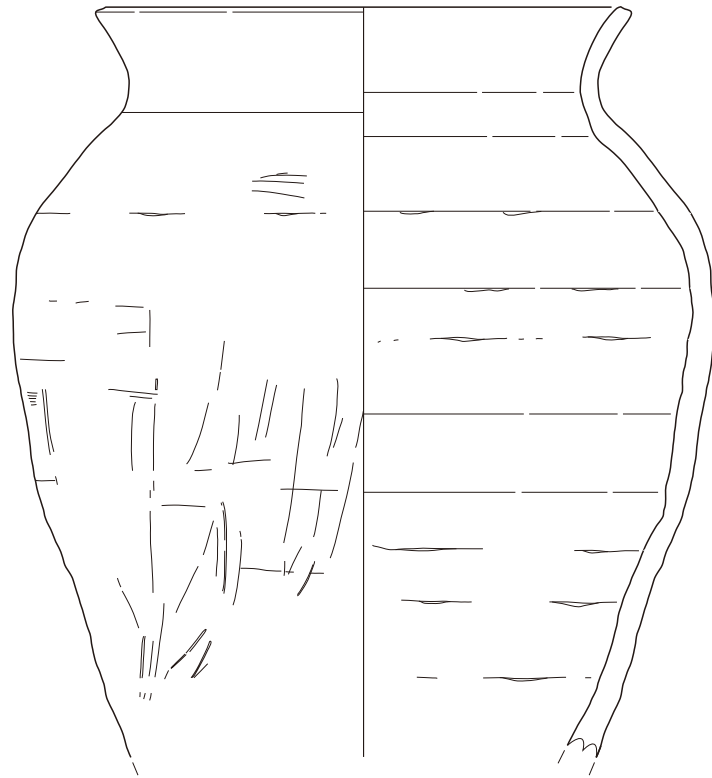
第 11 図 SD4 出土遺物実測図 (1:3)



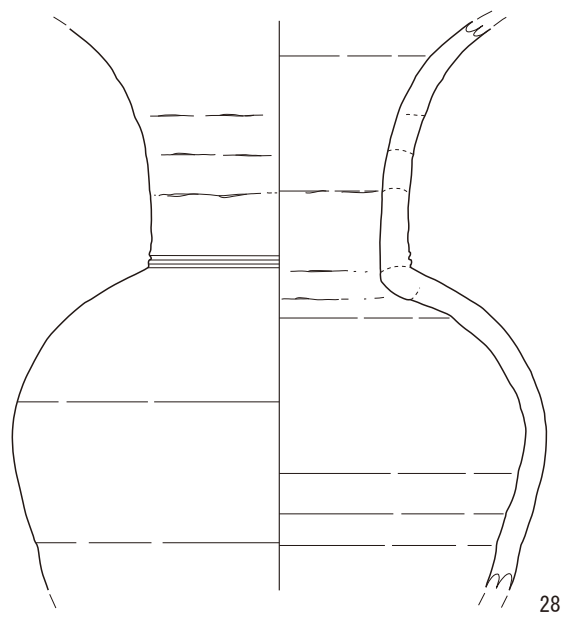
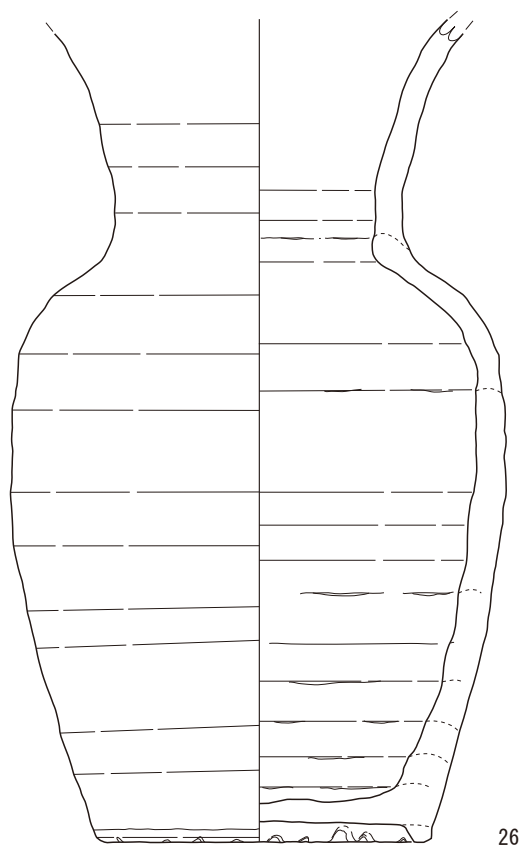
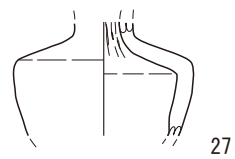
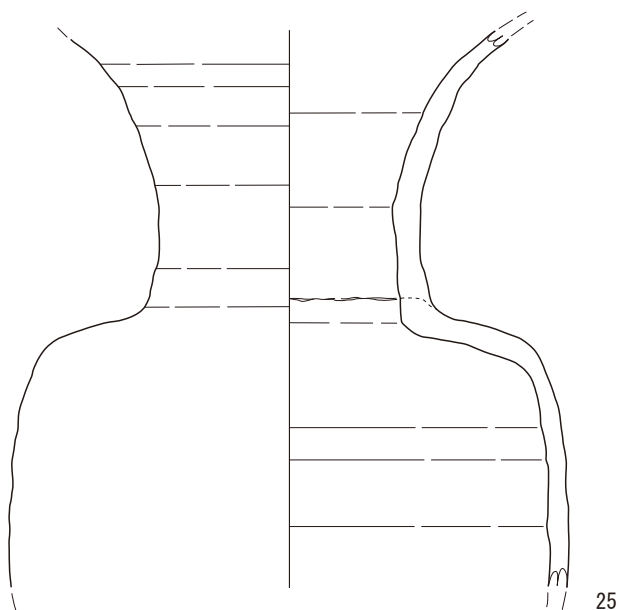
第 12 図 SD6 出土遺物実測図その 1 (1:3)



第13図 SD6 出土遺物実測図その2 (1:3)



第 14 図 SD6 出土遺物実測図その 3 (1:3)



第 15 図 SD6 出土遺物実測図その 4 (1:3)

SD7 (第 6 図、第 9 図参照)

遺構

B 区で検出した溝である。ほぼ東西方向を向き、東端で北方向へ短く屈曲して止まる。SD5 とほぼ平行して立地する。上幅は 0.8 m、深さ 0.1 mをはかる。遺構の前後関係は SD8、SK5 を切る形であった。堆積土は 2 層からなり、底面は平坦であった。底面から上端へは直線的な緩やかな傾斜で立ち上がる。

遺物は、遺構が浅いものであった事などから、細片が多く、須恵器杯、蓋と山茶碗が混在するものであった。遺構の配置で SD6 と平行に立地する点と合わせて思慮するに、遺物は須恵器などが、流れ込みの可能性が高いと考えられ、遺構は SD6 と同時期のものと思われる。

遺物

第 9 図 -16、17 は須恵器、蓋と杯 B である。蓋は、くの字に屈曲する端部から扁平な天井部を持ち、つまみの有無は不明である。杯 B は高台が細く端部は並行に接地する。18 は山茶碗類である。底部のみの出土である。器厚は薄く作られており、底部には回転糸切り痕が残る。内面には使用痕が見られ、胎土は緻密である。

SD8 (第 6 図参照)

遺構

B 区で検出した溝である。南北方向を向く。上幅は 0.6 m、深さ 0.11 mをはかり、SD6、SD7、SK5 に切られる形であった。底面は平坦で、底面から上端へは直線的に緩やかな傾斜で至る。堆積土は単層であり、遺物の出土はなかった。

土坑

SK1 (第 6、17 図参照)

遺構

A 区 E5 グリッドで検出した土坑である。遺構は調査区域外へ一部広がり平面形は楕円形であった。長軸 1.2 m、短軸 0.5 m、深さ 0.56 mをはかり、Ⅱ層の包含層下から切り込んでいる。堆積土は単層であり、遺物は須恵器甕小片が 1 点出土したのみであった。

SK2 (第 6、16 図参照)

遺構

B 区 B3 グリッドで検出した土坑である。平面形は楕円形であり、長軸 1.1 m、短軸 0.7 m、深さ 0.21 mをはかる。底面は平坦であり、底面から上端へは緩やかに立ち上がる。堆積土は 2 層からなり、自然堆積である。遺物は須恵器杯 B と蓋の細片が出土している。

SK3 (第 6、16、20 図参照)

遺構

B 区 B3、B4 グリッドで検出した土坑である。遺構の大部分は南側調査区域外へ広がっているが、検出した部分では方形を呈する形であった。長軸は 3.2 m、短軸 0.8 m、深さ 0.1 mをはかる。底面は平坦であり、底面から上端へは直線的に立ち上がる。後世の攪乱によって遺構は深く削られており、浅いものであった。その関係から遺物は須恵器杯 B など極少数が出土したのみであった。

遺物

第 20 図 -1、2 は須恵器の杯である。2 はいわゆる有高台杯、杯 B 片であり高台部分も一部が欠損したものであった。

SK4 (第 6、17、21 図参照)

遺構

B 区 B2 グリッドで検出した土坑である。平面形は隅丸方形であり、SD5 を切り、SD4 に切られる形で検出した。長軸は 3.4 m、短軸 3.3 m、深さ 0.68 mをはかる。堆積土は 7 層からなり、人為的に埋められたものである。底面は平坦であり、西側には中段を設ける。底面から上端へは東壁で直立して立ち上がるのに対し、西壁は緩やかに傾斜し中段に至る。中段からは直線的に上端に至る。

壁には遺存状態の極めて悪い形ではあったが、壁保護の為に考えられるムシロ状の植物繊維質のものを中段から底面の一部にかかる形で検出している。

遺物は上層や下層から須恵器杯 B や蓋を中心に壺甕なども出土している。出土状況に恣意的なものはなく、散発的な出土であった。遺構は遺物から 7 世紀末～8 世紀前半頃のものと考えられる。

遺物

第 21 図 -1～6 は須恵器の蓋や杯 B である。1、2 の蓋のつまみは欠損してなく、1、2 は端部が強く屈曲するものである。また杯 B は比較的径の大きいものであり、高台は外側へ開き、端部は平行に接地する。食膳具は一部に新しい様相も見られるものの、総じて 7 世紀末葉～8 世紀中葉頃のものと考えられる。7、8 は灰釉陶器である。9～11 は山茶碗類である。9、10 は口縁部のみの出土で、11 は底部のみであった。5 型式以降のものと考えられる。12～15 は須恵器の貯蔵具である。12 は横瓶であり、側面閉塞部分である。外面にはへら記号で×が見られた。13 は壺、14 は長脚な高杯である。内面には絞り痕が見られた。15 は甕の口縁部で緩い波状文が 2 条見られる。貯蔵具も食膳具同様 7 世紀末葉～8 世紀中葉頃のころのものと考えられる。

SK5（第 6、16 図参照）

遺構

B 区 C6 グリッドを中心に検出した土坑である。平面形は方形であり、SD6、SD7 に切られ、SD8 を切る形で検出した。長軸は 2.3 m、短軸 1.6 m、深さ 0.2 mをはかる。堆積土は単層であり、底面は平坦である。底面から上端へは直線的に立ち上がる。遺物は、須恵器、山茶碗などの細片がほとんどであり、流れ込みと考えられる。

SK6（第 6、18、20 図参照）

遺構

A 区 E6 グリッドで検出した土坑である。平面形は楕円形であり、SD3 を切る形で検出した。長軸は 4.5 m、短軸 1.8 m、深さ 0.33 mであり、堆積土は地山由来のブロック土が混在する人為堆積の単層からなるもので、SD3 がある程度埋没した段階で掘削し、SD3 が完全に埋没する前には埋まっていた遺構である。底面は浅い球形を呈し、壁面は直立して立ち上がる。遺物は山茶碗のほか須恵器なども出土している。時期は堆積状況や遺物などと合わせて 14 世紀前後の頃には廃絶したものと考えられる。

遺物

第 20 図 -3、13、14 は須恵器蓋、壺である。3 はかえりの付く蓋であり、かえりは短く小さい。7 世紀後半のものと考えられる。13 は口縁部で直立し端部は外側へ屈曲する。14 は緩い波状文が施文されている。4 は灰釉陶器碗である。5 ～ 12 は山茶碗類である。5 は小皿であり、底部のみの出土であった。6 や 7、9 の碗とセットになる時期のものであり、5 型式段階のものと考えられる。11、12 は東濃型の碗であり、14 世紀前後の頃のものと考えられる。

SK7（第 6、19 図参照）

遺構

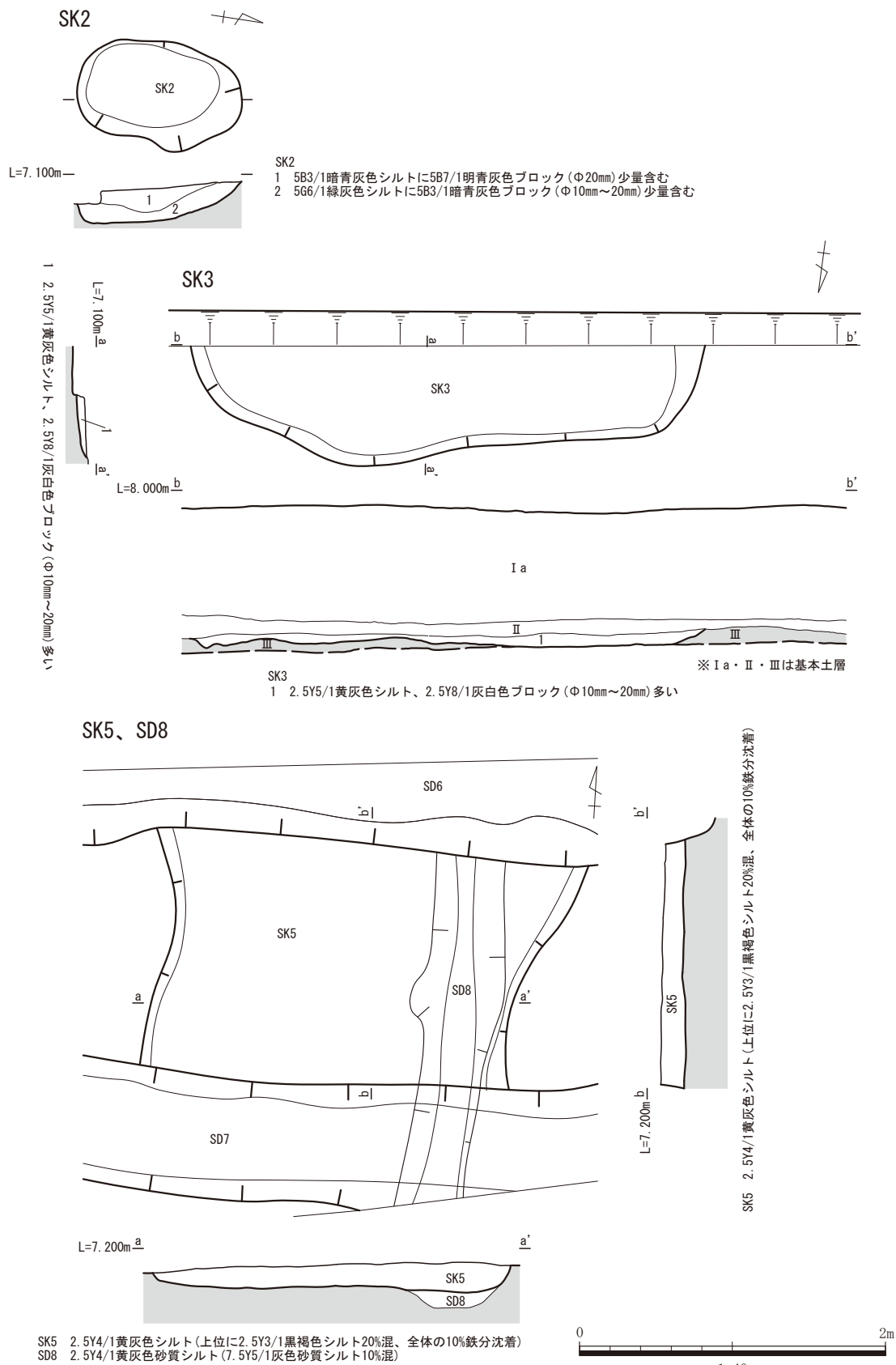
A 区 E7 グリッドで検出した土坑である。平面形は不整形であり、SD3 に切られる形で検出した。長軸は 2.7 m、短軸 1.3 m、深さ 0.27 mであり、堆積土は単層の粘質シルトであり、遺物の出土はなかった。

SK8（第 6 図参照）

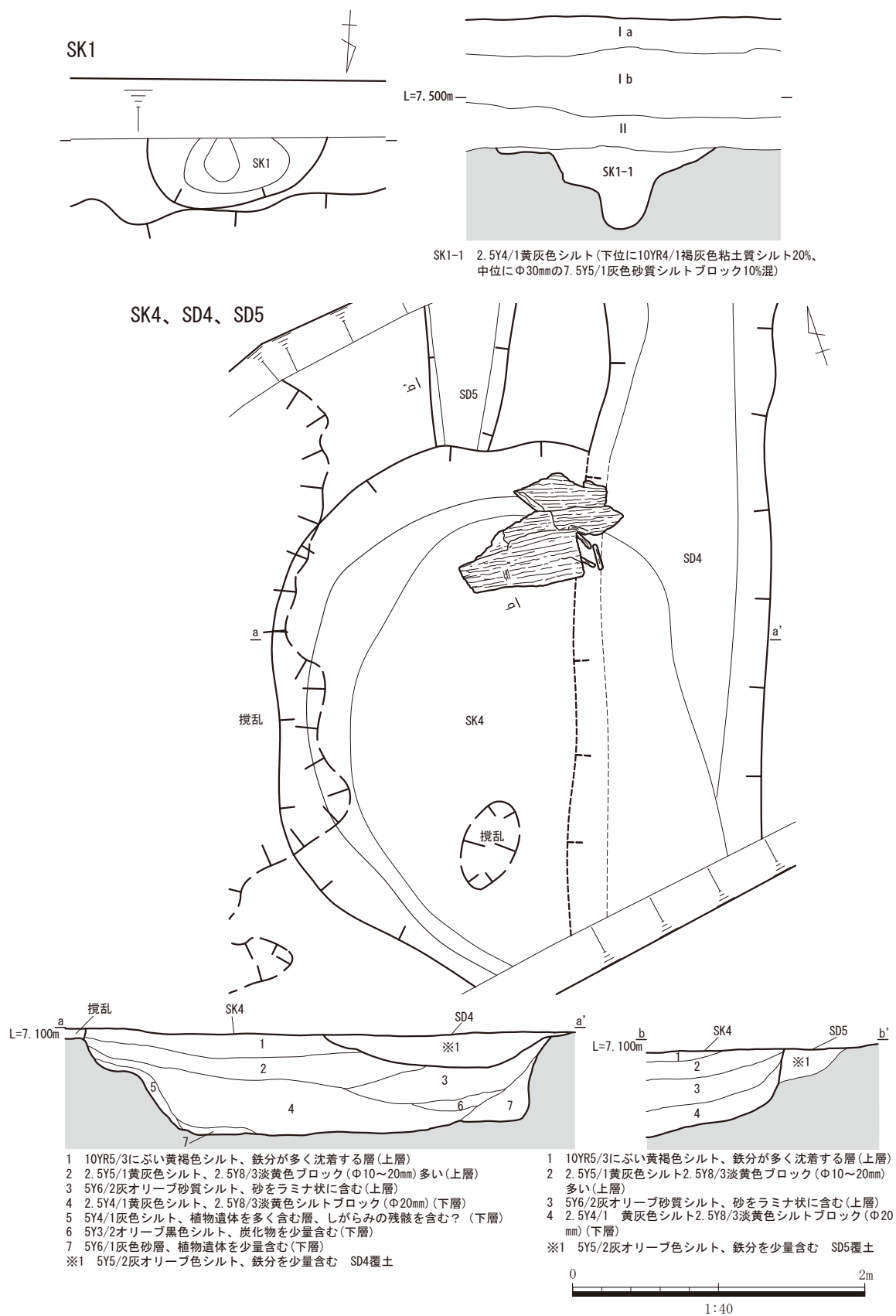
遺構

B 区 C2 グリッドで検出した土坑である。平面形は楕円形であり、遺構の一部は調査区域外へ広がる。長軸 0.5 m、短軸 0.3 m、深さ 0.32 mをはかり、堆積土は単層であった。

遺物は須恵器甕、白磁などが出土したが、散発的な出土状況であり、流れ込みの可能性が高い。

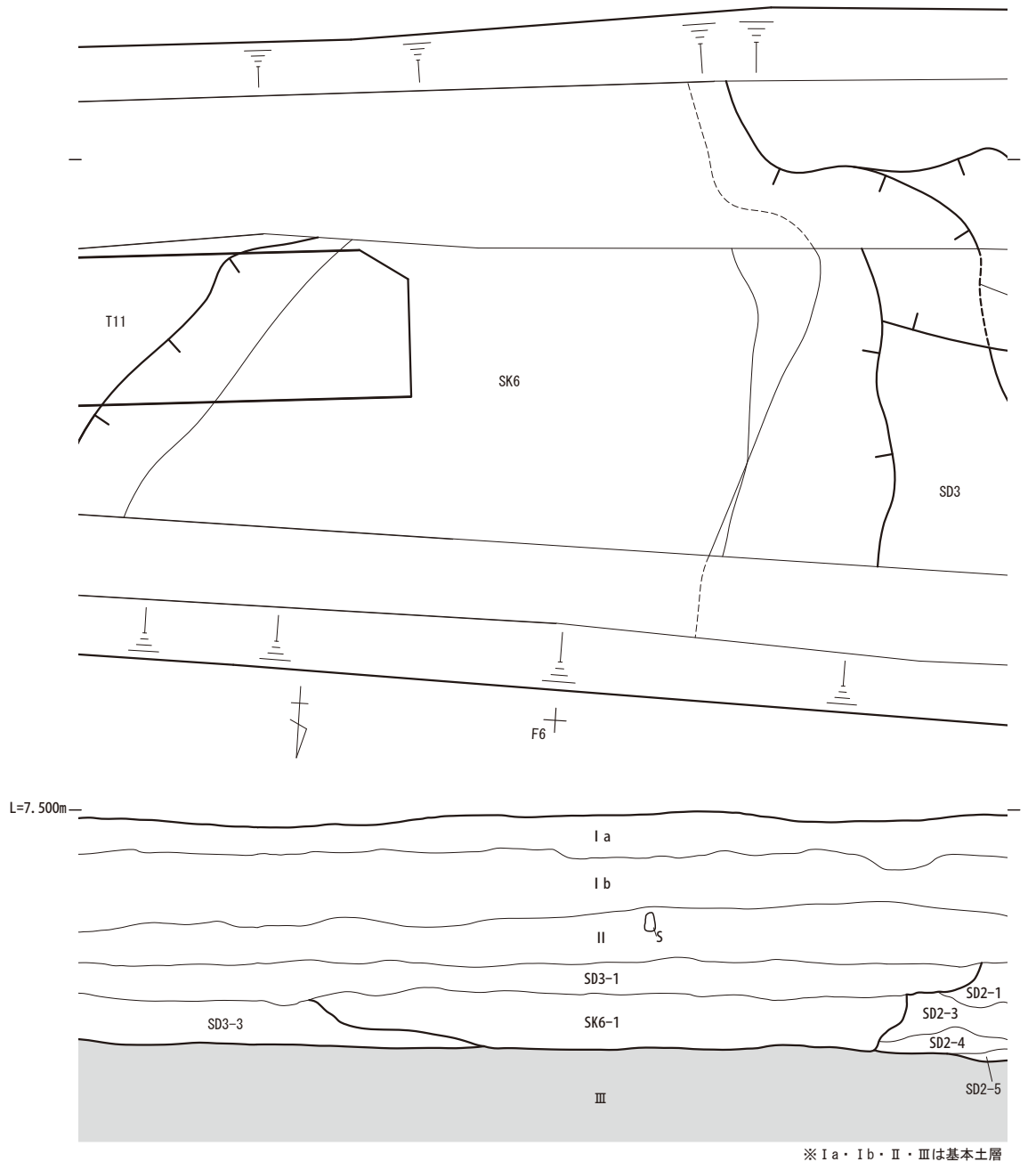


第16図 花ノ木遺跡 SK2・3・5、SD8 遺構図(1:40)



第 17 図 花ノ木遺跡 SK1・4、SD4・5 遺構図(1:40)

SK6、SD2、SD3

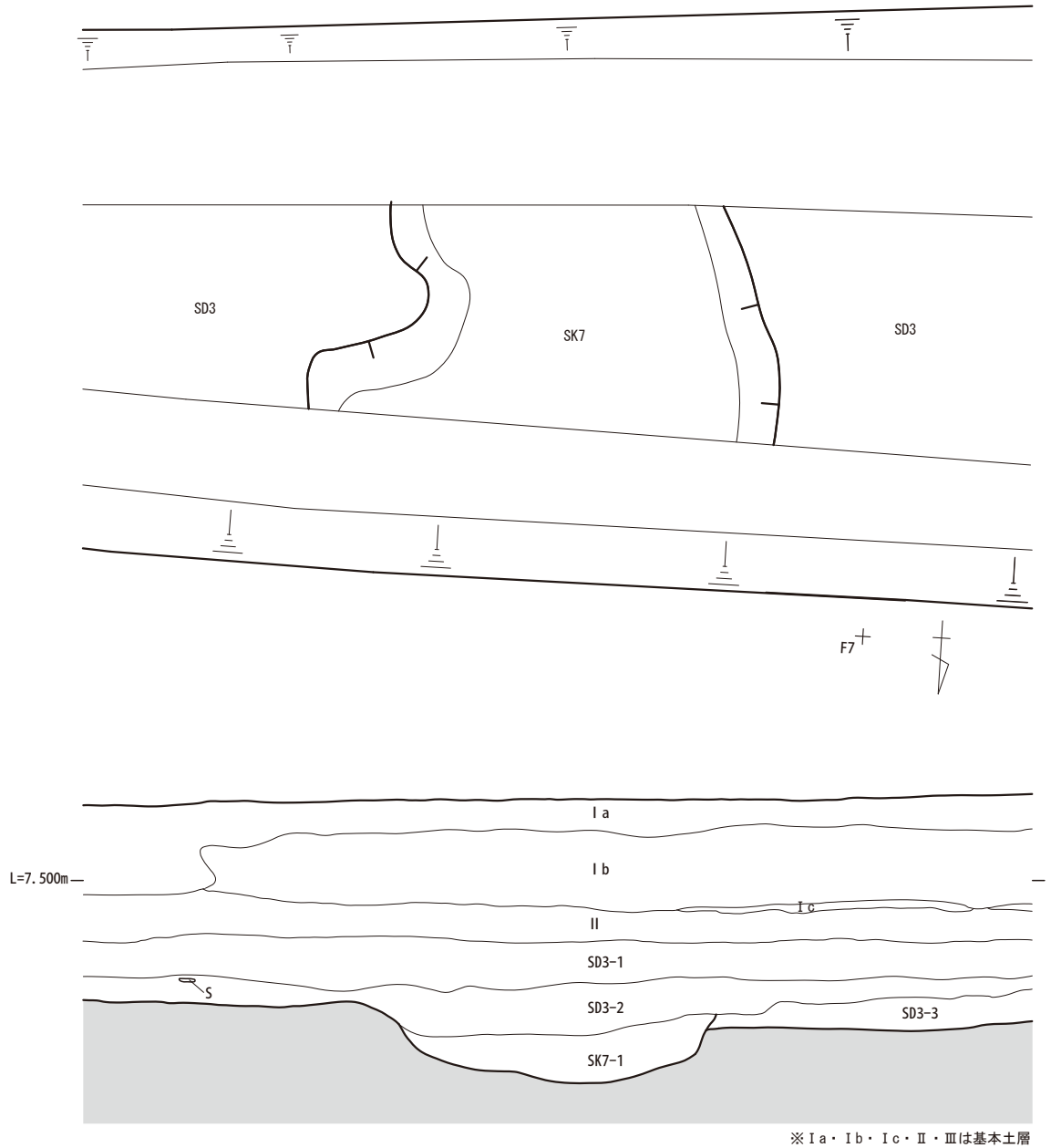


- SD2-1 2. 5Y4/1黄灰色シルト(7. 5Y5/1灰色砂質シルト・砂15%混、全体の15%鉄分沈着)
 3 7. 5Y4/1灰色シルト(Φ100mmの2. 5Y3/1黒褐色粘土質シルトブロック15%、7. 5Y5/1灰色砂質シルト10%混)
 4 7. 5Y5/1灰色砂質シルト(7. 5Y4/1灰色粘土質シルト10%混)
 5 7. 5Y4/1灰色シルト(7. 5Y5/1灰色砂10%混、全体の3%鉄分沈着)
 SD3-1 2. 5Y4/1黄灰色シルト(7. 5Y5/1灰色砂質シルト・砂10%混、全体の15%鉄分沈着)
 3 7. 5Y5/1灰色砂質シルト(2. 5Y4/1黄灰色粘土質シルトがラミナ状に10%混)
 SK6-1 7. 5Y4/1灰色シルト(Φ50～100mmの7. 5Y5/1灰色砂質シルトブロック10%混、全体の1%鉄分沈着)

0 2m
1:40

第18図 花ノ木遺跡 SK6、SD2・3 遺構図(1:40)

SK7、SD3



※ Ia・Ib・Ic・II・IIIは基本土層

- SD3-1 2.5Y4/1黄灰色シルト(7.5Y5/1灰色砂質シルト・砂10%混、全体の15%鉄分沈着)
 2 7.5Y4/1灰色粘土質シルト(7.5Y5/1灰色砂質シルト・砂7%、2.5Y4/1黄灰色シルト5%混、全体の10%鉄分沈着)
 3 7.5Y5/1灰色砂質シルト(2.5Y4/1黄灰色粘土質シルトがラミナ状に10%混)
 SK7-1 7.5Y4/1灰色粘土質シルト(7.5Y5/1灰色粘質シルト・砂5%混、全体の1%鉄分沈着)

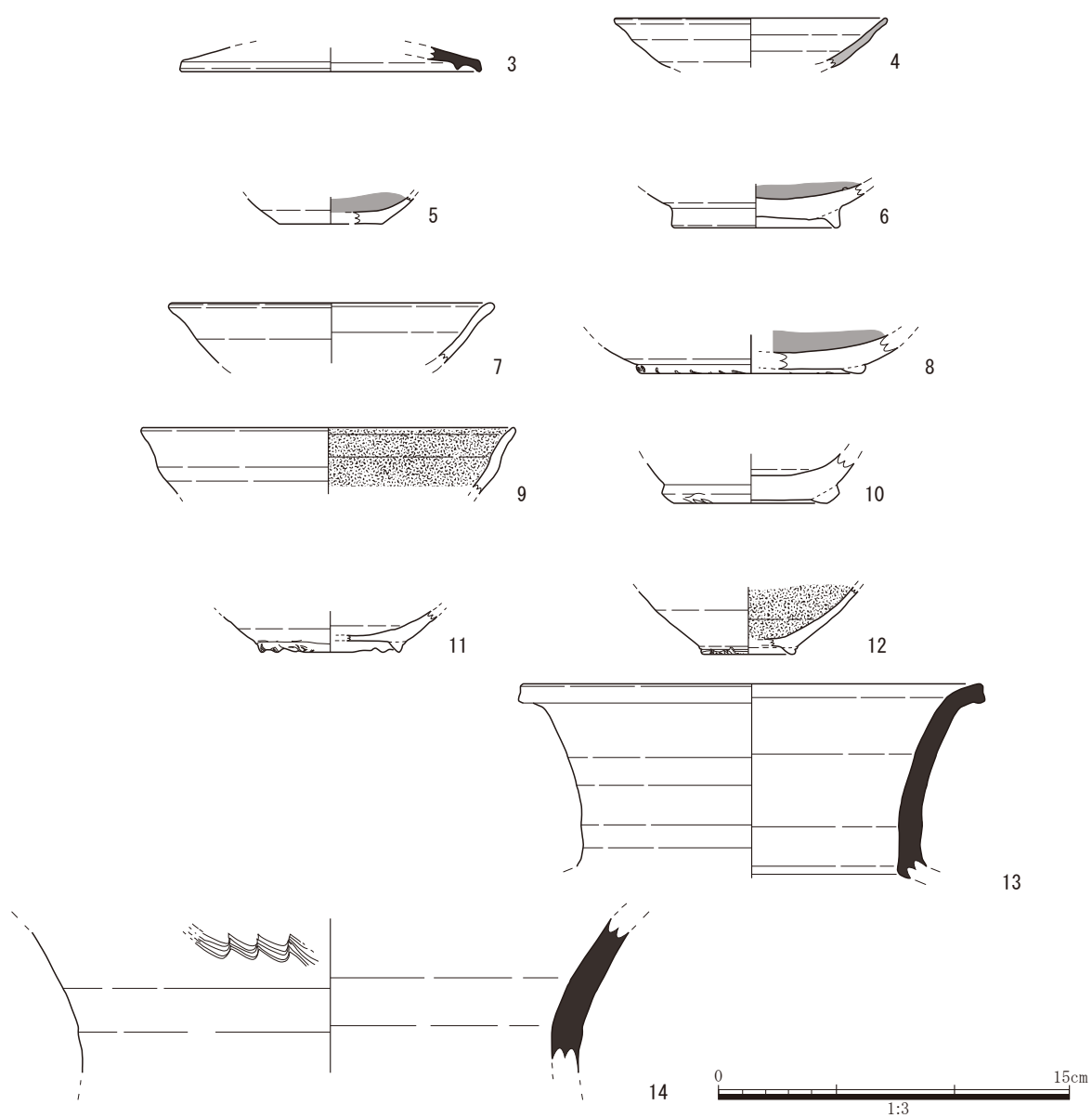
0 2m
 1:40

第19図 花ノ木遺跡 SK7、SD3 遺構図(1:40)

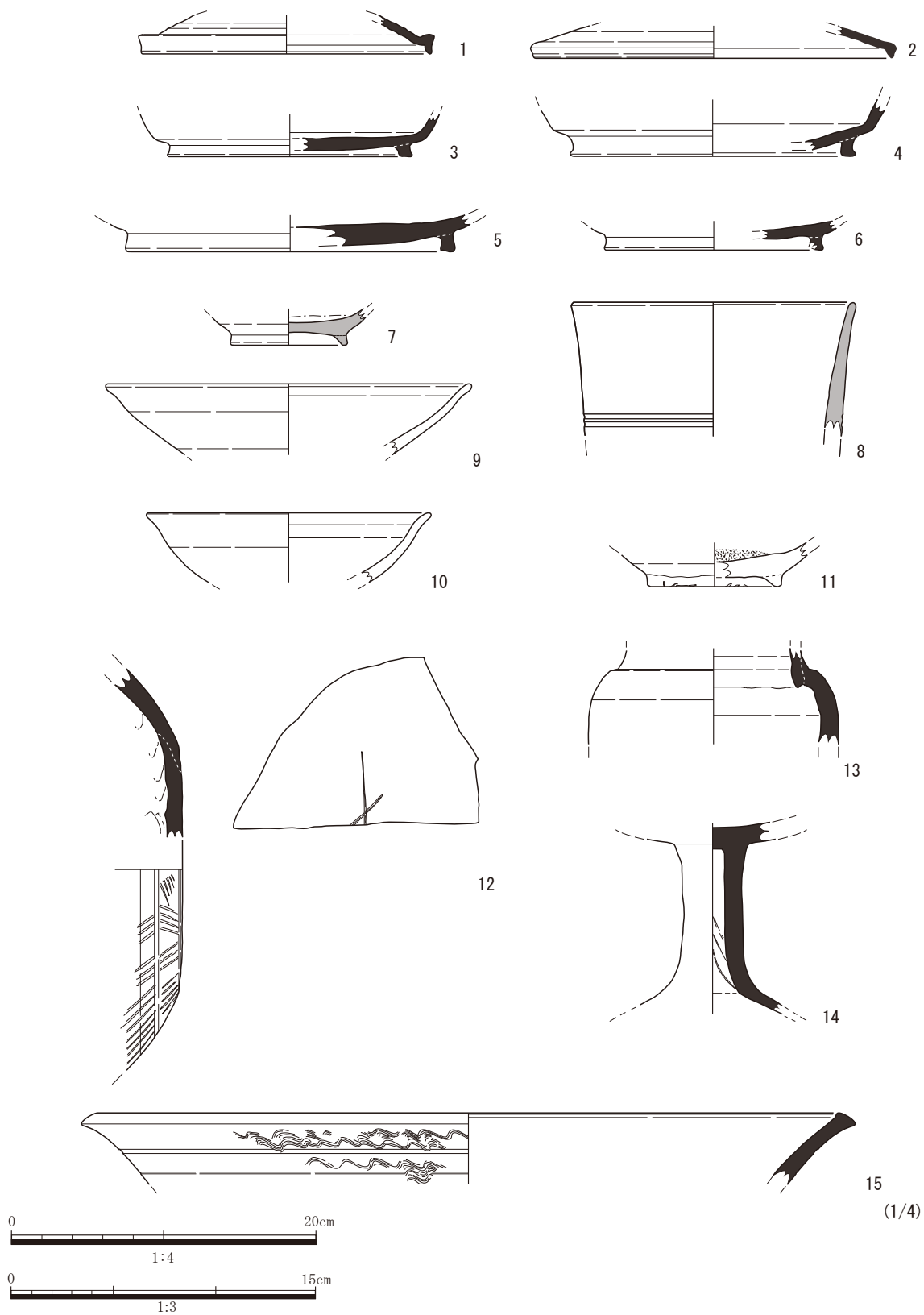
SK3



SK6



第 20 図 SK3、6 出土遺物実測図 (1:3)



第 21 図 SK4 出土遺物実測図 (1:3)